横浜市をフィールドにした
共創プラットフォーム設立プロジェクト
報告書

2015年9月

(c)株式会社富士通総研

1、プロジェクトの概要

2、プロジェクトのアプローチ

2−1　プロジェクトの構成

2−2　プロジェクトに使用した各手法について

3、リサーチ

4、公開型ワークショップ

4−1　公開型ワークショップの目的と構成

4−2　各回の概要

4−3　あしたのコミュニティラボ掲載記事一覧

5、連続型ワークショップ（ソーシャルデザイン・ラボ）

5−1　ワークショップ概要

5−2　連続型ワークショップの構造

5−3　ワークショップから得られたアイデア

5−4　参加者の事後インタビュー報告

5−5　ワークショップ後の取りまとめ結果

6、プロジェクト全体の振り返りと今後の展開

6−1　プロジェクトから得られた成果まとめ

6−2　今後の展開について

1、プロジェクトの概要

NPO 法人ミラツクは、株式会社富士通総研実践知研究センターと共に、「横浜市をフィールドにした共創プラットフォーム設立プロジェクト」を実施した。本プロジェクトは、2014 年 10 月から、2015 年 8 月までに行われた（なお、2014 年から 2015 年 1 月までを本プロジェクトの前半とし、2015 年4月から 2015 年 8 月までを後半とする）。

本プロジェクトの前半部分では、取り組みの中心を、社会課題を基盤とした地域と共創するプラットフォームづくりとし、エスノグラフィーと、データリサーチを中心に取り組まれた。本プロジェクトの初めには、プロジェクトのフレーミングを行うために、実践知研究センターの OB/OG を中心に、富士通グループ社員にインタビューを行い、日々の仕事の中や、日々の生活の中で感じる課題について広く意見を収集した。同時に、横浜市内で活躍する市民セクターの方々からの意見収集も行った。ここでは、富士通グループの社員と、横浜市民の方々のモチベーションの拠り所を検討することを中心におかれた。その結果として導かれたのは、「都市のシビックプライド」「教育」「子育て」「高齢化」「中小商店の衰退」の５つのトピックであったが、チーム内での議論の結果「教育」に絞り込まれた。その後、「教育」に関する仮説形成を行うにあたり、教育の専門家や実践者の方々にインタビュー調査を行った。これに加え、データリサーチや、書籍からの知見や前例調査を実施。その結果、新しい力を学ぶことと、新しい力をオンラインで獲得するという分野が未発達であることが確認された。

本プロジェクトの後半部分では、取り組みを「横浜で育む新しい学び」プロジェクトと名付け、市民と協働できるプラットフォームづくりを公開型ワークショップ、連続型ワークショップの形で行い、また、連続型ワークショップでは、新しい力をオンラインで獲得するという課題設定に対して具体的なアイディアの創出に取り組んだ。同時

に先進的な事例となる教育現場として、東京コミュニティースクール（東京）、ラーンネットグローバルスクール（神戸）、NPO 法人 cobon(大阪)、国際バカロレアのフィールド調査を行った。

プロジェクトのプロセスを外部に発信するため、富士通が運営する WEB メディア「あしたのコミュニティーラボ」と協働をし、ワークショップの事後レポートの執筆や、調査手法の公開等が行われた。

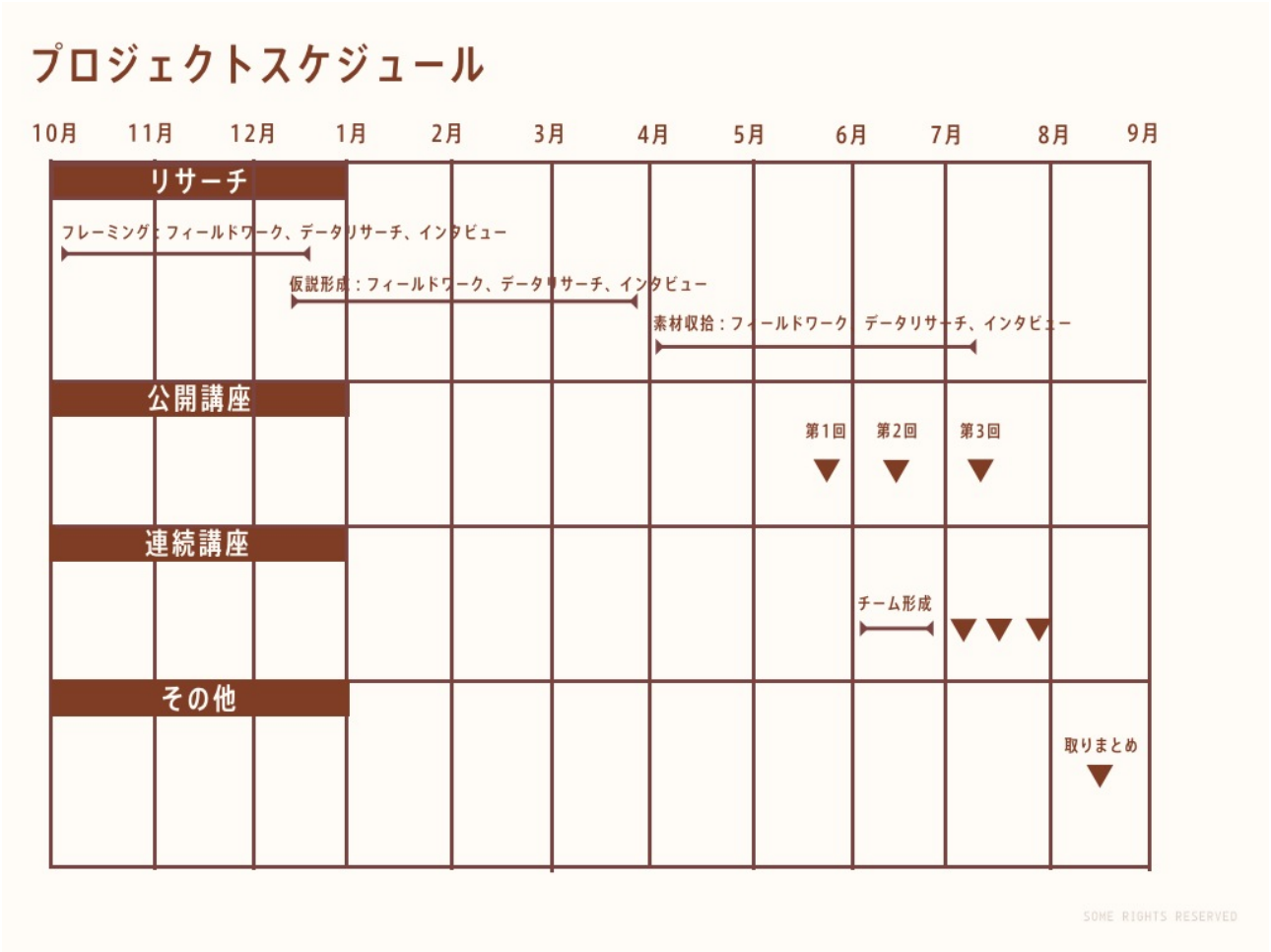
公開型ワークショップからは、アーリーアダプターの市民が持つ課題意識として 40 テーマが挙げられ、延べ約 200 名の参加を得た。また、連続型ワークショップからは新しい力を育む学びに関する 27 個のアイディアの他、就学児を持つ親の課題意識に関する 18 のカテゴリー、新しい力についての 10 の要素（未来をつくる力）と新しい力を育むことを支える 20 のカテゴリーが得られた。

2、プロジェクトのアプローチ

本プロジェクトは、エスノグラフィーの手法を活用したリサーチ、ダイアログの手法を活用した公開型ワークショップ、デザイン思考の手法を活用した連続型ワークショップの 3 つ、及び取りまとめのためのワークショップによって構成されている。

2－1　プロジェクトの構成

プロジェクトは、2014 年度の予備調査によって形成された仮説に基づいて「新しい教育×学び」をテーマに、「横浜」をフィールドに設定し、行われた（※予備調査は本プロジェクトの前半で行われた）。



①リサーチ

リサーチは、2015 年 4 月~7 月の間行われ、主に「新しい教育×学び」を先行的に実践する”探究型学習”の現場から先駆的知見を抽出するために行われた。

3~4 月：フィールドワークとインタビューによる「新しい教育の実践者」の調査

5~7 月：ソーシャルデザインワークショップに向けた素材形成

②公開型ワークショップ

公開型ワークショップでは、「生きる力が育つ教育」をテーマとしたダイアログセッションを計 3 回開催。教育に関心が高く行動力がある市民が集まり、富士通総研実践知研究センターOB/OG、現役研究員が混ざり合いながら参加する場を形成し、ネットワークの基盤を作ると共に、市民や実践知研究センター関係者が持つ課題意識を見える化することを目的として実施された。

・日程と概要

第一回　5 月 26 日（火）　NPO 法人東京コミュニティスクール　探究プロデューサー　市川力氏

第二回　6 月 2 日（火）　同志社女子大学現代社会学部現代こども学科　特任教授/ネオミュージアム　館長　上田信行氏

第三回　7 月 7 日（火）　隠岐國学習センター　センター長　豊田庄吾氏

③連続型ワークショップ

連続型ワークショップでは、「新しい力を育む学びを IT で前進させるには」をテーマとしたソーシャルデザインワークショップを計 3 回実施。実践知研究センターOB/OG、公開型ワークショップの参加者を中心に、事前アンケートによって参加者を選抜した。テーマに関するインプットとソーシャルデザインのフレームを元に、富士通が「新しい力を育む教育」に関わる具体的なアイデア形成に取り組んだ。

・日程と概要

7 月 1 日（水）　18:30-21:30 ◯チームビルディング ◯ソーシャルデザイン演習 （宿題）インタビュー	7 月 15 日（水）　18:30-21:30 ◯インタビュー結果をシェア ◯ソーシャルデザイン演習 ◯アイデア形成 （宿題）事例調査	7 月 25 日（土）　10:00-18:00 ◯事例調査結果をシェア ◯先進事例を共有 ◯ソーシャルデザイン演習 ◯アイデア形成 ◯プレゼンテーション

2－2　プロジェクトに使用した各手法について

今回のプロジェクトは、①エスノグラフィーの手法を活用したリサーチ、②ダイアログの手法を活用した公開型ワークショップ、③デザイン思考の手法を活用した連続型ワークショップの 3 つを組み合わせて行われた。

リサーチでは、「横浜の社会課題→5 つのトピック→教育→新しい教育と IT」という段階を経た仮説形成と、新しい教育の代表的な 3 事例における現場の知見の掘り起こし、の 2 つを目的に行われた。エスノグラフィーの特徴である、未だデータになっていない事象を観察とインタビューによって表出させることを生かし、社会と富士通グループ社員の双方が求める missing point を見つけ出し、仮説形成の参考にした。仮説が、新しい教育と IT と設定された後は、事例となる取り組みの現場に赴き、実践の中にある暗黙知の抽出を行った。

公開型ワークショップでは、当該領域のパイオニアによる講演と参加者の課題意識を基盤としたアイデアディスカッションを行い、パイオニアに共感するアーリーアダプター層を掘り起こすと共に、外部の市民を含めた参加者が持つ課題意識の見える化を行った。パイオニアの講演からは現場で先駆的に行われている知見を学び、また、個人の課題意識を中核にディスカッションを行うことで、一方的な講演で生むことの難しいであろう密度の高い関係性の構築を行った。

連続型ワークショップでは、富士通グループ社員と外部からの参加者（教員、市役所職員、他社社員、など）と協働することで発想の幅を広げながら、インタビューやフィールドワーク、事例収集などの宿題によって客観的な情報の補完と当事者意識の形成、を行い、最終的には 1 人 1 案のアイデアを生み出した。アイデア創出には、デザイン思考による現場基点の発想、量を重視した発想、組み合わせによるアイデアづくり、などが用いられている。

3、リサーチ

本調査は、2015 年 3 月から、2015 年 7 月の間で行われた。探究型学習と呼ばれる、児童、生徒が自ら調べたいテーマを決め、自ら調査を行う学習手法を実践している、①東京コミュニティスクールと、②ラーンネットグローバルスクールを先進的な事例として調査を行った。また、キャリア教育の一つの手法として、NPO 法人 cobon が大阪市天王寺区と協働して実施している③キッズシティ天王寺も取り上げた。④その他として、国際バカロレアに関してのインタビュー調査も行った。インタビュー調査は、実践者に加え、その周辺でその実践に参画している方、児童の保護者の方、その実践の協力者にも行われた。インタビュー調査の協力者一覧は以下である。尚、NPO 法人ミラツクがリサーチへを実施し、報告書への資料を提供した。

事例 1：東京コミュニティスクール

NPO 法人東京コミュニティスクール　探究プロデューサー（校長）　市川力様
NPO 法人東京コミュニティスクール　探究者（教員）　中島敦子様
NPO 法人東京コミュニティスクール　探究者（教員）　今鷹悠一郎様
NPO 法人東京コミュニティスクール　保護者　中西佳代子様
NPO 法人東京コミュニティスクール　保護者　松木仁様

事例 2：ラーンネットグローバルスクール

ラーネットグローバルスクール　代表　炭谷俊樹様
ラーンネットグローバルスクール　ナビゲータ（教員）　藤原真季様

事例 3：キッズシティ天王寺

NPO 法人 cobon　代表理事　松浦真様
NPO 法人 cobon　松浦智子様
天王寺区　区長　水谷翔太様

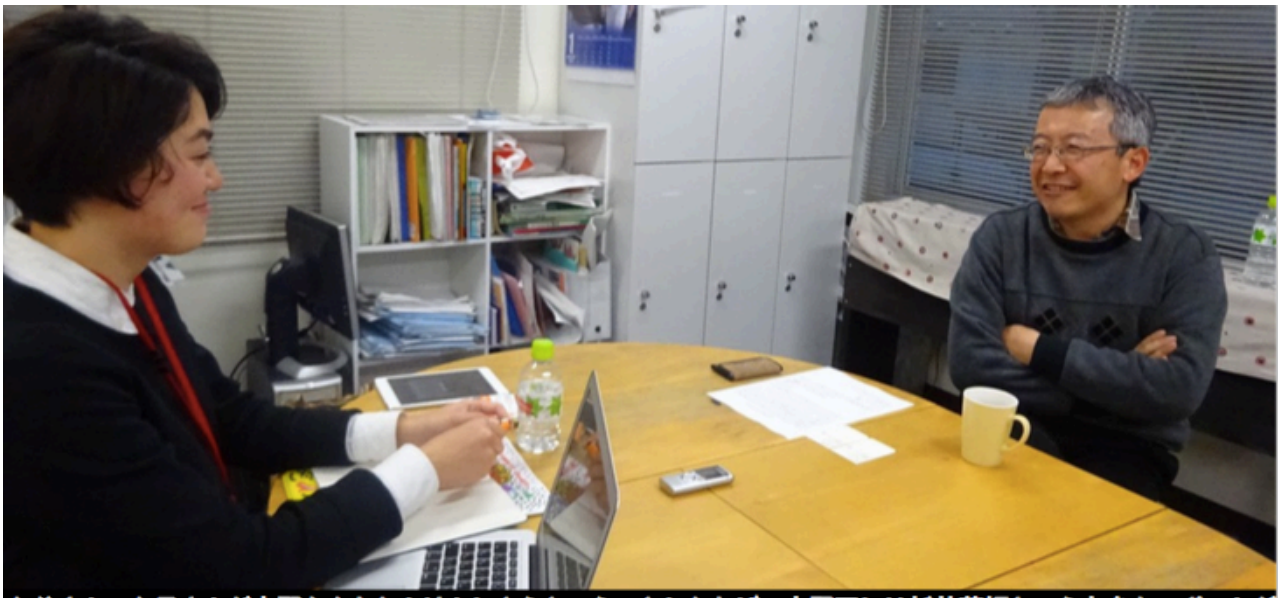
事例 4：その他

文部科学省大臣官房国際課　国際協力企画室　室長補佐　小林克嘉様

事例１：東京コミュニティスクール

特定非営利活動法人東京コミュニティスクールは、2004 年の夏に東京都中野区にて開校された。「思考と行動のつながり」をベースにして学ぶ学習スタイルと明記される、「探究型学習」を積極的に取り入れている。探究型学習では、児童自らが、自分の興味があることに関して、フィールドワーク調査、ヒアリング、インターネットを使用しての調べ学習、関係者へのプレゼンテーションを実践する。

Tokyo
Community
School
東京コミュニティスクール



お父さん、お母さんが中野をまちたんけんしようということになれば、中野区には新井薬師という有名なスポットがあるから、まずそこを目指しましょうとなる。そのうえ、途中の道行きであれこれ注意が向くっていうことは少ない。でもね、子どもの場合、かりに新井薬師をゴールにしたって結局、到達しないんですよ。５０メートル進むだけで、あれこれ発見して立ち往生です。そういう歩き方っていうのを大人は忘れてるんじゃないですか。ここで言いたいのは「できない」って言うんじゃなくて「忘れている」っていうところ。身につけていないからできないんじゃなくて、身につけているからできない。かつてはみんなそんなことをやっていたのに、それをいつしか失っているんです。

理由を聞きますね。なんかやったときには。なんでも。こどもたちもそうで、理由を聞いてきたりとか。だから一方的っていうのは理不尽だから、お互いにとっての。だから「なんでそんなことを言ったの」とか「なんでそんなことを考えたの？」とか理由をお互い聞くように心がけているところ。私の方では心がけていることで、まわりもそういう風に、「なんでそういう風に考えたの」とか言ってくるので、そういってくると言葉の裏側にある思っていることが出てきたりとか。

インタビュー結果１： NPO 法人東京コミュニティスクール　探究プロデューサー（校長）　市川力様

□問題意識

探究の基本構造は仕事と同じ。まさに本気で取り組むプロジェクトなんです。１年生から４年生まで全員がクリエイティブ・ライティングの時間に物語を書き上げている。とにかく個性が爆発していて、面白いんだけど、文も構成も非常に不完全。何が書いてあるのかわけわからないものもある。でも、子どもが自分の思いを素直にさらけだした原石がそこにある。そこで、５・６年生に「子どもだからこそ書ける面白さ」というコンセプトを前面に打ち出した本をつくろうというプロジェクトを提示する。ただ文集をまとめるというのではなくて、子ども編集者だからこそ、すくいあげられる感性で大人には編集できない本を本気でつくろうというわけです。上級生は、下級生の書いた、判読するのも困難なような字で書かれた、つながりがはっきりわかりにくい、めちゃめちゃな文章を、ただ添削しない。字が汚いのは、発想のスピードに書くスピードが追いついていないだけ。ということで作家先生となった下級生に「どんなことを書こうとしたの？」ってインタビューして、一緒に文章をつくりだしてゆく。普通国語の授業っていうのは良い文章を読ませて、その文章のように書かせるように、読めるようにするっていうんだけど、むしろとっても拙い文章なんだけど、それをどうしたら意味が通り、かつユニークな文章にできか必死に考えることによって、どんどん文章力がついてしまう。「よい本を出したい」というミッションがベースになっていて、文集をつくればいいというタスクではない。子ども達は先端の学校にいるという自負とともに、自分たちが特別なことをしていると言われるのをとても嫌がる。「おっちゃんムカつくよね、東京コミュニティースクールだからできるんだって見学に来た人はみんな言うじゃん。でもね、そうじゃないよ。世の中の子どもはみんなこうしたいんだ」って訴えてくる。 (中略) 子どもの思ってることを素直に出して、それ学びに活かしていくっていう場が探究なんだよね。子どもたちが、「なんだこんなこと言っていいんだ」って思って、言っていいんだじゃなくて、むしろそういうところからスタートして気づきを得ることが大事なんです。だから妙にまとまった「完成」は目指さない。どこまで言っても不完全だという自覚を持って最善を尽くす。ましてや始めは不完全なかけらを出さずしてどうして探究ができるのっていう感じ。だから、イントロダクションでこうして、どういう資料を用意し

て、調べるフェイズがあって、発表のフェイズがあってという道筋を経れば探究しているというわけではない。子どもたちの持つ素直な思いをさらけ出して、与えられた仕事をどんな風に遂行していったらより意味深いものになるか常に考え続ける。こうしたらいいか、ああしたらいいか、みんなで動きまわり、試してみて、できるだけ面白いアウトプットをつくりだしてゆく。こんなプロジェクトを 6 週間で 1 個ずつこなし、年間 6 個のプロジェクトに関わる。そして各プロジェクトの終了後には必ずオーディエンスに向かっての発表し、世の中に問う。これがうちのスクールの最大の特徴です。 (市川、2015 年 1 月)

②探究型学習を通して得られる力

「自分なりに熟慮して、構築した意見を表明するようになること」
「自分は変われる、変でもいいのだという自尊心」
(例) うちのスローガンは変人になろう。変人には 3 つの意味がある。まず、「ユニーク」であること。次に、「変わる＝change」ということ。決めつけずに変われる人であること。最後に、変だなって気づくこと。「差異」に気づくからこれぞ「差異能」。あれ、変だなって思ったら自分の感性を信じろ。何か変だと差異能センサーが動いたんだって。こうして人と異なることへの不安が消え、先行きが見えないことへの耐性がつくられる。(市 川,2015 年 1 月)

③保護者への説明

こっちをやったほうが良かったんじゃないかみたいに、どうしても目先の方法論にひきずられちゃう。でも、本当に大事なのは、将来子ども達にどんな人になってもらいたいか、つまりたくましく生き続ける人になるために小学校時代に何が求められ、何ができるのかっていうふうに考えないといけない。(市川、2015 年 4 月)

④探究型学習を実践するために必要とされる力

「こじつける力」

予定していたところとは異なるところにたどり着いたとわかった時に活用する力
(例) 人間こじつけるってことが重要で、B になったからって A と無関係なわけじゃなくて、何か繋がりがあるはず。こじつけてみると、「あ、もしかして!」っていう、予定調和な流れでは生まれない、イノベーティブで面白いものが見えてくるんですよ。(市川, 2015 年 4 月)

「コネクティングドッツ(Connecting Dots)」

直感に従って行動した結果、あるものとあるものが繋がってしまったことを愛でること
なんとなく直感的に思ったことにしたがって行動してみたらあるものとあるものがつながっちゃった、っていうことを報告してもらいます。(市川, 2015 年 4 月)

「チェンジングパースペクティブ（Changing Perspective）」

コネクティングドッツから何か新しい考え方を発見したか、または新しい気づきがあったかということ
(例) コネクティングドッツが生まれたことによって、「何か新しいものの考え方とか気づきがあったかということを尋ねる。 例えば、「決めた通りじゃなく歩きまわってみたら、道端に直感的にひっかかったものがあった。自分にもそんな感覚があったなんてびっくりです」というような気づきこそ評価するのです。コネクティングドッツを経験した結果、自分のものの考え方にどんな変化があったか振り返って報告してもらうのが、とっても大きい気がします。(市川, 2015 年 4 月)

□学習支援の方法

「思いつきを歓迎する姿勢」

探究なんてできないと思い込んでる子どもも大人も本当にアイデアがないんじゃなくて、「それは間違っている」「おかしい」って言われるんじゃないかと恐れて言い出せないだけです。だからまずは、思いつきを素直に出させるっていうのがカギだと思いますね。「思いつきからのスタート上等！」みたいな強烈なメッセージを送るべきで

す。(市川, 2015 年 4 月)

話し合ってみて一枚模造紙が埋まっちゃったときに見えたものからとりあえず始めてみるんです。なんとも「場当たり」的 にやってみればいいんです。ここが人間の認知の面白さって、仮に偏ったところにいったとしても、なんとなくその反対側がみえてきたりする。最初から無難なものを選ばせない。今日、みんなが思った方向にまずは突っ走ってみよう。不安かもしれないけれど、この不安が明日の発見の原動力になるかも。だって、これで大丈夫？他にないかな？どうしてこれなんだろう？っていろいろな可能性がぐるぐる動き始める。だから、「このフィールドワークで失うものなどないんだから思い切って行きましょう!」とまずは試してみることが大事だと思います。(市川, 2015 年 4 月)

「道化のようなユニークなファシリテーター」

トリックスター的で道化。つまり、絶対にユーモアが必要なんだよ。陰険じゃだめで、「なんだかなぁ巻き込まれちゃったなぁ市川さんに～」という軽みというかお馬鹿さみたいなものをもって「ちょっとこっち行きましょうよ～、絶対綺麗なものありますよ」って挑発してみる。多くの場合、そっちの方向に実は行きたがっているという雰囲気も察知しているわけですけどね。だから結局、最後のふんぎりをつけさせる存在っていうことなんじゃないかな。(市川, 2015 年 4 月)

「ジェネレーター」

自分が意見を言っても雰囲気を悪くすることはない。むしろ、思い切ってバイアスを出して、意見を修正するきっかけをつくるんです。自分が「複眼的」になるというより、みんながいるから自ずと「複眼」になれるという感覚。つまり、傍観者としてではなく自分も完全にプロジェクトの一員として参加しているんです。自分も相応の責任を引き受ける。その上でどこかで俯瞰して眺めることも忘れていない。(中略) 私を含め、メンバーがお互いリスペクトし合ってるっていう感じがあります ね。逆にいうと、こういう雰囲気なり、流れなりを乱すようなこと

があったときに、ジェネレーターっていうのはそれを「それはちょっとルール違反です」みたいなことを言ってしまう役割もジェネレーターは持ってますね。(市川, 2015 年 4 月)

「本気の発表の場」

子どもだから好きなこと言えばいいよじゃなくて、きっと君たちの発想が世の中を変えるのに生かせるはずだって、本気でプレゼンテーションできる場を設定する。あとはさっき言ったようなことをしているだけ。それを探究だと私は位置づけてるわけです。(市川, 2015 年 4 月)

インタビュー結果２：

NPO 法人東京コミュニティスクール　探究者（教員）　中島敦子様

NPO 法人東京コミュニティスクール　探究者（教員）　今鷹悠一郎様

①現場での学習支援

「対等な関係性を持つ」

理由を聞きますね。なんかやったときには。何でも。子どもたちもそうで、理由を聞いてきたりとか。だから一方的っていうのは理不尽だから、お互いにとっての。だから「なんでそんなことを言ったの」とか「なんでそんなことを考えたの？」とか理由をお互い聞くように心がけているところ。(中島, 2015 年 4 月)

良いなと思ったら、声に出して、私の方で思ったことは、ちゃんと伝えるようにはしている。たとえば「いいね！」だけでも、何がいいのか子どもはわからないと思うので、「ここがいいね」とか、「考え方のここがいいね」とか、「正解を言ったことではなくて、考え方がいいね」とか。「全然違う見方で見ているんだね」とか心がけたりしています。あとは、こっちが「しまったな」と思ったら、素直に謝るようにしています。(中島, 2015 年 4 月)

「新しい視点を提供する」

みんなが、4年生でもどういうことを考えたらいいかわからないときには、「こういうことを考えたらいいんじゃないの？」とか、やっぱり考える方針というか、というのはこっちから投げかけたりとか、そうすると結構つぶやいたりとかしてくるので、そういうのをメモとったりとかしながら、それに対して「そういう風に思ったんだ」って、一つの意見からつながって派生していく言葉を私の方が書記というかメモをとる感じで、子供がそれを見ながら、「誰々が何言ったけど、今思うとそことつながるのかな」という話になったりとか、そういう手伝いはしたりしていますね。それで子どもの中で、私は子どもたちから「あっちゃん」と呼ばれているんですけど、「あっちゃんの意見も聞かせてくれる」とか言われたりとか。聞かれたら率直に意見を言ったりとか。

(中島、2015 年 4 月)

「挑発をする」

ちょっと挑発してみたりとか。「あっそ、それできないんだ」とか。（中略）「まぁ、いいんじゃない？難しいよね」とか言って、「んじゃやるよ！」っていうそんなちょっと、押したり引いたりみたいな。ケースバイケースですけどね。（今鷹、2015 年 4 月）

インタビュー結果3：

NPO 法人東京コミュニティスクール　保護者　中西佳代子様

NPO 法人東京コミュニティスクール　保護者　松木仁様

①子どもに対する期待

学歴があるということが重要ではないなと感じていたんですね。自分の仕事とか、いままでの経験で、自分で考えて自分で切り開いていく力がないとダメだろうと思っていて、そのために何でも与えられて、そのなかで良くできる子どもじゃなくて、自分の頭で考えて何をやりたいのかを決めていくような子どもになってほしくて。

(中西、2015 年 4 月)

どんな環境においてどんな仕事していても、常に探究するってことが重要で、そのような人になってほしかったので、どんな仕事をやっても良いんですけど。常に探究して、「なんでだろう、なんでだろう」ってそれって一番幸せな形だと思うので。だからそういうことを小学校の頃からできる環境があるんじゃないか、そうしたらそれが東京コミュニティースクールであって、それで東京コミュニティースクールに決めた。(中西、2015 年 4 月)

答えのないものを模索するっていうのが、仕事のほとんどだと思うので、それ自体分かるって言うのは素晴らしいと思うんですよね。子どもの時から「答え教えて」って言って学校で答えを習ってくるんだけど、答えのないことだらけなんだということを小学校から学べるというのは、すごく大きいことだな、と。でも、親として感じるのは、東京コミュニティースクールが求めるものとか、先生たちが言っていることは、すごく私も共感していて、今言ったようなことを、色んな言葉を変えて息子に伝えているんですね。(中西、2015 年 4 月)

要は詰め込みじゃないっていうアンチテーゼ的な意味合いっていうのが大きかったんですけれども、(中略) 頭に残りやすい。要はその単純に頭に詰め込むとかそういうものではなくって、その確実にその自分から関与していくことができるか、あるいはできる可能性が高まるっていいますか。それはその集団で取り組むとなおさらそういうことになるんですけれども、ほかに一つの課題が宿題として出てきた場合、複数にまたがって、要は、例えば脳の中で複数の知識が結びついた形で残るので、一つのものだけが積み重なっているだけじゃないっていう、相互関連ができることによる、その相乗作用っていうことは、期待するとこだし、結果としてそうなってほしいなと思うところ。（松木、2015 年 4 月)

東京コミュニティースクールを出て中学受験っていうのはいらないかもしれないなって思って。それくらいだったら、東京コミュニティースクールの今やっていることをがっつり取り組んで欲しいなと思った。

（松木、2015 年 4 月)

②保護者としての教育観

仕事をせざるを得ないですし、仕事をすることが人生で一番の喜びだと思っているので、それを続けていくということは、本当に自分がやりたいことをずっと突き詰めていくことが一番理想じゃないですか。嫌なことを無理矢理お給料をもらうためにやるんじゃなくて。なかなかそういう風に生きられている人って少ないんですけど、大人でも。そういうふうに生きてほしいなと思っていて。そのためには探究する意欲があれば、自ずとそういう仕事に自分がやりたいことを見つけて、そういう仕事につくだろうし、そのなかで、苦しい時期もあると思うんですけど、好きなら続けられるじゃないですか。だから、その時代にいま IT が花形だから入るんじゃなくて、仮にその時に下火な産業であっても、それが好きで、そこで探究したいと思う力があれば続けられるし、良い時代も来るだろうから。そういう考え方でいくのがすごい重要なのではないかと思った。(中西、2015 年 4 月)
本当は競争しなきゃいけないの自分自身であって、他人じゃなくて、自分の目標に打ち勝つっていうか、それでまわりの人と協力し合うという、そういう人間になれると、たぶん大人になって仕事をしても、全部まわりの人と一緒にやっていくことが仕事なので、それをうまくできれば。そういう意味でもすごく、そういう機会を学校が与えてくれるのはいいな、と。(中西、2015 年 4 月)
自分がやったらこういうことがうまくできたり、やりたいとか。そういう体験型、体験をしながら学んで行くというのは、すごく人が吸収する上ですごく重要な要素で、それは家事でもそうだし料理を作るのでも、お風呂を湧かすでも、掃除をしたりとか、なんでもそうなんですけど。うちだったら、ある意味私が全部できるし、洗濯機がやったりするんですけど、それをうちの息子に「やって」と言わないとそういう状況を作り出せない。でも、例えば私が病気で倒れて、主人がいなくて。一人でなんか作らせる状況になれば、あの子はやると思うんですね。そういう状況がある程度つくらないと、ないっていう、ないという、そういういまの社会の豊かさとか、そういうところが子どもに課題を与えていない、というか。そういう、トライして、自分で体験しながら試行錯誤しながら、なんかやり抜いて、こういうふうにするんだ、という過程を、社会の状況とかが、子どもにやらせない環境になっているんじゃないかな、っていうのがひとつ、(中略) 実はそういうことよりも、生活とか毎日の生活の中から学んで行くということから得ることが多いかもしれない、でもそれを自然に学んで、体験して学ぶ環境が社会にはあまり

ないというか、それがひとつの難しい。(中西、　2015 年 4 月)
一個の科目を詰めこみ式で学ぶんじゃなくて、一つのテーマに取り組む中で、いろんな分野のその、結果的に学ぶんだっていう。「これじゃん」って思って、それが結果的にわかって。んで、そういうのがあるんだったら、こういうところに「入れたいよね」って妻と話をした。（松木、2015 年 4 月）

③家庭内での取り組み

昨日も割合の話をしていて、イチローが 3 割のバッターで、という話を、夕食の時に話題がでていて、じゃあ、3 割ってなんだろうという話をしていたんですけど、パーセントという話が学校でているか私はわからなかったですけど、ある程度は分かっているみたいなんですけど、パーセントと 1 割 2 割という概念が結びついていなくて、10%が 1 割で、とかの話をしたんですね。じゃあ、イチローが 3 割のバッターってどういう意味だと思うって言ったら、全然分かっていないんです。それに結びつけてリンゴの話をしていて、リンゴが 10 箱段ボールの中に入っていて、100 個入っていて、赤と黄色のリンゴが入っていて、その中に赤いリンゴが 10 個入っていて、そしたら赤いリンゴが 1 割だとか、そういう話を最初にしていて、「じゃあイチローが 3 割打つってどういう意味だと思う？」って。リンゴの話は簡単なんですけど、それをイチローに置き換えたときに、すぐにそれはわからないんですね。(中略) 昨日もずっとしぶとく、(答えを)言わないで、「どういう意味だろう」って考えさせたんですよ、色んなことを言いながら。(中西、2015 年 4 月)
たとえば受験に対する考え方も変わったと思います。(中略) みなさんの話を聞いている中で、いままでの私と主人は固定観念で、中学受験ではこういう選択肢があって、こういう塾に行ってってという、一般的な常識からでられない部分があったので、そのなかでどうすればいいんだろうと思っていたんですけど、実際に入って色々な方の話を聞くなかで、無限に選択肢があるんじゃないかなって最近は思っていて。中学でも。だから、結局今までの私たちの常識の中で、知っている学校しか頭に浮かばないし、とかあったんですけど、たぶんもっといろんな学校があるし、いろいろな選択肢があって、もうちょっと広く情報収集がしていく必要があるかな、とか。そういう受

験に対する考え方も変わったし、子どもに対する求めることも、やっぱりあの上から押し付けてはだめなんだということも、頭では分かっていても、今までいろいろ言ってたりしたんです。子どももモチベーションがないと伸びないんだなということをつくづく感じてきているので、最近ガミガミ言っても無駄だな、とか、そうじゃないアプローチが必要なんだろうな、と。(中西、　2015 年 4 月)

確実に、あれやれ、これやれ、というやり方はやらなくなりました。さっきから出ている、モチベーションを高めるとか、本人がやる気を出すためにどうしたらいいかな、ということを考えるようになったりとか。あとは上から目線じゃないけど、一緒に考えることがすごく重要で、こう、私がこの子の知らないことを教えるというよりも、一緒に考えたり、一緒に悩んだりすると、もしかしたら一緒に伸びるかもしれない。与えられるというよりも、ママも分からないから一緒に考えて、一緒に考えついたらすごいな、って子どもも思うじゃないですか。そういうことを体験しながら、そういう機会を増やして行くのが良いのかな、と思ったりして。わたしは仕事をしているので、仕事の間に見たかったら他の地域を視察に行く時に子どもを連れて行ったりとか。子どもは別にただ単に他のところに行って遊んでいるだけなんですけど、他の地域に行って、他の文化に触れたりとか、そういうことの方からの方が学ぶことが多いかもしれないな、ということは、私が彼に接するという言う意味では変わった。
(中西、2015 年 4 月)

今なにやってるの？っていう会話が自然と出てくるくらい、保護者会で、出てればね、普段テーマ発表会行ってない父親であっても、こういうことやってるんだよなっていうことは頭の隅っこにあるから。家で子供と会ったときでも、そういう会話ができるじゃないですか。それが一番大きいんじゃないですかね。親子の会話がずっと成り立つ。（中略）　逆に子どものほうが話しやすくなって、今日学校でこういうことをやったよみたいな話が必ず出てきますし。そこでの学びっていうのが肯定感があったりとか、あるいはその、なんていうんでしょう。その話すことによって記憶に残りやすくなるという効果はあるんじゃないでしょうか。ま、結果としてまぁ家庭の中でもあれですよね、だから、手伝いごとをさせるとか。（中略）　まぁ文句言わずにやりますよね。ある程度コミュニケーションがそうやってできてるとね。（松木、2015 年 4 月）

④子どもの変化

子どもの変化は、とにかくその、入学式の日か、見学に行った日からなんですけど、ほんとに学校が好きで、今も学校が好きで楽しくしてしかたないという。そこの部分、楽しいと思って行っているのは一貫している感じですね。(中西、2015 年 4 月)
変化として目に見えて感じたのは、去年の 3 年生になってからステップアップしたな、と感じたときがあって、それは学校が与えてくれた試練なんですけど、文化祭みたいなのがあるんですけど、子どもたちが出し物とか歌歌ったりするじゃないですか。そのときの簡単な司会みたいな MC をまかされて、でまぁ、「次はなんとかです」とか言うだけなんですけど、その間にちょっと用意とか準備とかで時間を待たせなければいけないときに、簡単な話をしたりとか、なんかそんなことを先生がさせてくれて、そのことがきっかけで、そのあとの、学園祭のあとに、学芸会、歌とか踊りを披露する、学芸会があって、その場でも司会のアシスタントみたいなことをやらせてもらって、司会自体は今度 6 年生になった子がやったんですけど、そのアシスタントみたいなことをやらせてもらって、なんかそれでひとつ皮が剥けたというか、なんか自分に自信がついたんじゃないかという気がします。それはなんというか人前で話すおもしろさを自分で体感したんじゃないかという感じかな。みんなが笑ってくれると嬉しいし、その学芸会のときも、次の人が歌ったり踊ったりするための準備で舞台の準備時間の時で、自分で小話をつくって話したりとか、それも私は一切手伝わずあの子が考えてやるので、大して面白くもないんですけど、子どもなりにいろんな話を、例えばこの間スキー行って、転んで、板をなくなってしまって、それを探すのが大変でしたとか、ふっと自分が思いついたエピソードをみんなの前で MC として挟んだりして、そういうのが一つの多分自信になったんじゃないかな、と。そういう経験をさせていただいているのがすごくいいことだなぁ、と。 (中西、2015 年 4 月)

まわりをすごくうまくやるタイプなんですよね。友だちもすぐできるし。そういう人付き合いとか、人との接し方という意味では、東京コミュニティースクールに入ったからというよりも、もともと持っていた天性の、そういう長所みたいなところはあるんですよね。だからお友達との関係で東京コミュニティースクールに入ってすごくこういうところが伸びたな、というのは、それに磨きはかかったと思うんですけど、特にこれという話はないですけど。ただとにかく一人っ子なんで、上下にお友達ができているというのが、彼のそういう協調性というところを伸ばしている気がするんです。これが同級生の中で競争だけの関係にいるよりも、ずっと本人、彼にとってプラス何じゃないかなって。だから下の面倒をみるの大好きですし、上に遊んでもらうのも大好きなので。

(中西、2015 年 4 月)

お呼ばれっていうか、「ちょっと来ない？」みたいな感じで。それをまぁ、去年は 6 年生でしたけれども、去年は下級生の男の子のお宅に、呼ばれて、そこで夕食なりをご馳走になって帰ってくるという。そう、こう東京コミュニティースクールで通常やっているフィールドワークの中で普通の大人に接触するっていうこともありながら、更にその他の他所の親御さんにも可愛がられたりして、それはすごくよかったなと思って。

（松木、2015 年 4 月）

街の中を歩いて、商店街を調査する時に店のそのおじさんおばさんと話をしたり、話を聞いたり、インタビューしたりする中で、まぁそこでなんていうんでしょう、何でも聞ける。何でも聞いちゃうみたいな、いうことは必然的にやりますから。そういうところで培われる対人接触能力といいますか、まぁ大きいと思いますね、まず。元々そういうのが得意の子っていうのはやると思いますけれども、不得意な子もやらざるをえないっていう。そういう訓練というかそういうトレーニングになっているんだと思うんですよ。だからなので、探究するっていう過程の中で行われるものですけれども、探究をする中で、そのものとはちょっと違うかなと。思って。その副作用といいますか。（松木、2015 年 4 月）

息子無口ですけれども、どっか問い合わせ先とか、自転車盗まれました、「じゃぁ警察いったか？」「行った、行った」保険の申請しなきゃいけない。「んじゃぁ、それも自分でやれ」みたいな。んで、まぁ普通にその保険屋とか、自転車屋とか電話して、まぁやってましたね。そのへんは、まぁ無口で大人しい。小学生にあがって、その最初の発表会やったときはその様子をみると、あの子がまさかこうなるとはというようになっているという。親の気持ちとしてはね。という驚きはありますけれども、いやわかんないですよ。（松木、2015 年 4 月）

もちろん仲がいい子どもばかりではないんですけれども、「あいつは嫌だ」とかっていうふうに、特に二番目がいう相手もいましたが、なんていうんでしょうね、それは小さい集団２０何人か、当時娘のときは１４人マックスくらいで。その学年ごとにいろんな役割があって、とくに最上級学年になると、その責任とかが任されるなかで、期待されて、期待に応えて、まぁいろんなことをやる。もちろん学習だけではなくて掃除みたいなこともひっくるめてね。そういうことでもって、自分の居場所が、自分としての居場所があるっていうことはあるんじゃないかなぁ。（松木、2015 年 4 月）

上の息子の場合はなんでしょうね、東京コミュニティースクールっていう環境の中ではいろんな関わりができたことと、あと結果として彼はまぁ中学校あがってっていこう、彼ら東京コミュニティースクールのときはペーパーテストみたいなのがなかったんですよ。受験勉強みたいなのは東京コミュニティースクール自身がやるっていうことはなくって、受験勉強につながるようなことですね。最後になって若干、そういう特別講習みたいなのをやったりしたんですが、そういうペーパーテストというのがない状態で、中学校に入ったら、逆にそれが楽しくなっちゃって。なんか、学校の中間とか、期末試験があったときに、そういうのはどうも嫌いじゃないらしいっていうのがわかってきて、ただそのもちろん勉強しないとうまくいかないっていうのも本人はわかってきて。んで、自分から塾に行くって言い出して。そういう意味では彼は、自主性がついた。（松木、2015 年 4 月）

2 番目は、東京コミュニティースクール入ったときには（中略）わー！とかぎゃー！とか泣き叫ぶ声が絶えない6人組みだったんですけれども、その中で本当に自分のこと、自己中心的に自分のことを考えて、わーっと言って

いた子供同士が切磋琢磨して、結果的にまぁすごくいい感じで、こうなんていうんでしょうね。大人になったっていうんでしょうかね。まぁ、相手のことを考えられる大人になったっていうんでしょうかね。大人になった。 （松木、2015 年 4 月）
三番目の子供に関しては、まぁもともと好奇心が強かったんですけれども、それを伸ばしてもらえたこと。 （松木、2015 年 4 月）

事例２：ラーンネットグローバルスクール

ラーンネットグローバルスクールは、1996 年に神戸市にある六甲駅の近くにて設立された。アフタースクールのクラスを拡充した後、1998 年にフルスクールを開校し、第 1 期生を迎え入れ始めた。始めに紹介した東京コミュニティースクールとも密接に連携を行っている。基本理念は、「Oplysning(オプリュスニング)」というデンマーク語で、「自分を照らし、相手も照らし、お互いに成長する」こととしている。子ども達の主体的な探究心や学習意欲が失われないように、一人ひとりの興味や特徴を尊重すること、日常で起こる問題解決を子どもたち主体で行えるような支援や、自分の意見や気持ちを表現し、人の意見や気持ちを理解するコミュニケーション力を身につけることといったコンセプトを置いている。

これしなさい、これしちゃいけませんっていうような「強制命令禁止罰則」は基本的に使わない。これしたみたら。こんなこと考えてるんだね、とか提案や質問などをして子どもに自ら考え、判断させるようにする。学校はよく「強制命令禁止罰則」をつかうけど、普通に会話したらいいんですよ、人間として。上から目線じゃなくて、普通に会話すれば。何らかの興味のある題材で。それで十分だと思う。普通の社会で行われていることが、学校の中では行われていないほうが特殊とも言えるのでは。

その見方が一つじゃないというところですかね。どうしても、その子どもだけの考えでこうかなっていうのだけじゃなくて、じゃ、こっちから見たらこんな考えもあるよ、とか、別の方向から考えてみたらどうかな。自分の考えももちろん言ってもいいし、じゃあ相手の考えも聞いて、理解するというところは、気をつけていますね。その考えが否定するとか間違えじゃなくて、別の考えもあるよね、って。後は、自分の考えを述べることに共感する。ちっちゃい子に対しては特にですけど、ああ、そういうところが楽しかったね、とか、そこ頑張ったんだね、とか。認めてあげるっていうことは、認めて上げることによってみんなに分かってもらえたとか。そこは表情に現れるところですし。みんなに気に入ってもらえたっていう安心感に繋がっていくと思うので。

インタビュー結果１：ラーンネットグローバルスクール　代表　炭谷俊樹様

□問題意識

やっぱり日本の教育って偏差値型なんですよ、基本的に。テストして、いい点とった子は良くて、悪い点とった子はだめっていう、偏差値型の考え方で支配されてきたものを僕は探究型に変えようと言っていて。自立・競争・自分の幸せは自分で決める・人や社会に貢献できる。勝った、負けたとかじゃなくて、とこういう考え方でいこうよ、とあっちゃこっちゃで話しをていまして。探究実践にかかわるんですけど、子どもでも一緒なんで。

(炭谷、2015 年 5 月)

②スクールが大切にしていること

「強制命令禁止罰則が含む指示をしない」

これしなさい、これしちゃいけませんっていうのは基本的に使わない。これしたら。こんなこと考えてるんだね、とか。強制命令禁止罰則以外ですね。だったら何でもいいかな。でもほとんどはそうなんですよ。先生が子どもに言ってることって。それ以外だったら何でも。普通に会話したらいいんですよ、人間として。上から目線じゃなくて、普通に会話すれば。何らかの題材で。興味のある題材で。それで十分だと思う。それがないから、学校の特殊性というか、普通の社会で行われていることが、学校の中では行われていないというか。

(炭谷、2015 年 5 月)

「人・もの・自分を大切に」

人を大切に、ものを大切に、自分を大切に、を原則にしているんですよ。そういった中で子ども同士が喧嘩した時、誰かと誰かが喧嘩しちゃった、誰かが泣いちゃった、という時、やったほうは、悪気はなかった、ちょっとふざけてただけかもしれない、でもやられたほうがいたかったって泣いちゃった。それは、傷つけたってことですよね、だからそれは、じゃあ謝ろう、これから気をつけようって話合って、気をつけよう、ってことをやっていく。

(炭谷、2015 年 5 月)

「本音を爆発させること」

ラーンネットでしていることは、本音で語る。ナビ(ナビゲータ：教員)も、自分の意見をズバっという。そうすると、子どもたちも意見をズバっと言ってくれるように変わっていった。ちょうどそれも、同じ頃ですよね。形式をやめていって、どちらかというと、子どもたちが伸びていってほしいと思うから、大人は少し引いて、子どもたちにやりたいようにやらせてあげる、だからちょっと引いてしまう。すると、子どもも引いてしまうんですよ。逆に次、ナビがやりたいことをぐっと、こうだって押していったら、子どもも押し返してきたんですよ。だからやっぱり、人間なんだなっていう。形じゃないんだなっていう。本当、人間対人間なんですよ。そこが、うちのラーンネット（グローバルスクール）は強いんじゃないのかな。うちは、ナビは一人一人個性強くて。すごいですよね、主張がね。だから、あれがいいのかな。子どももそれに答えて、子どもも自分の個をぐっと遠慮なく出してきて。そんな感じですね。(炭谷、2015 年 5 月)

押さえ込んでしまうのではなく、爆発させます。そういう経験が結局、その後のあらゆる人生の局面で、その経験、自分のエネルギーを迸らせた経験が、絶対プラスになります。押さえ込んで、ストレスためて、我慢して、ま、それもいいかもしれませんけど、そればっかりだと辛いですよね。そういうこともたまには必要だと思いますけど、それはやっぱり、面白いっていうポジティブなエネルギーがあって、はじめて我慢ができるんだと。それもなしに我慢、我慢、我慢って、どっかでね、暴発しますよね。ある意味ね。突然人を殺すって、あれって相当ストレスたまっていたんだなって。そうならないように、ポジティブにエネルギーを出すっていう経験を、散々やっとけば、後は全然心配ないんじゃないんですか。そんなに無茶しないと思うんですけどね、彼ら。この間にいろいろ悪いこと含めてやっといたほうが。喧嘩とかね。（中略）社会をやっていく力がつかずに逆に心配で。少々喧嘩したり、ぶつかったりけがしたりってのをある一定レベルでやっといたほうが、後々強いと思います。

(炭谷、2015 年 5 月)

「相乗効果」

結局やってわかったことは、探究型の力と偏差値型の力は比例するんですよ。探究型の子は受験もうまくいくことがわかりました。矛盾じゃなくて、相乗効果。(炭谷、2015 年 5 月)

□保護者との相互理解

探究型っていうのは、ほとんどの人が偏差値の中でそだっているから、探究のイメージが湧きづらい親御さんもいるので、説明したり、安心してもらったり、お子さんはこういうふうに成長してますよって話をしたり。基本的には安心してもらって。どうしても、親御さんって、普段学校見ている訳じゃないので、実際子どもはすごく伸びていても、例えばテストとかしないので、うちは。テストが何点、何点ていうわかりやすい指標がないので、探究シェアリングという子どもが自分の探究したことを親御さんや他の子供達と共有する会を毎学期ごと行っています。(炭谷、2015 年 5 月)

子どもさんのいろんな変化、気持ちに対してきちっと向き合っているってことですね。やっぱりこう、一人一人はこう違うから、例えば学校だと極端な話、いいお子さんと悪いお子さんとカテゴリーにされちゃうんです。出来る子、出来ない子って。それは絶対うちしないんで。カテゴリー化は絶対しないんで。誰々ちゃん、誰々くんて、は、こういうこと、こういうことをしましたって。絶対個別でしか話さないんで。一人一人見ていますから。それが一番安心感。僕は自分の子も通っていたんで、面談で親の立場で聞いたこともあるんですけど、ちゃんと見てくれていたのかなって一番の関心事です。うちの子は、できること、できないこといろいろあるけど、どっちも把握してくれていたら安心だけど、ちゃんと見ていてくれなかったら、ちゃんと見ていてもらえないっていう心配になる。そこをきちんと見て、日々のコミュニケーションもあるし、学級ごとの面談でも、お子さんのこと、こういうところは伸びましたよ、とかこういうところは、ちょっとまだできてませんねって、きちんと具体的に伝えられたら、「あ、そうなんですよ、うちの子はね」って安心していってくれる。あとは、心配なところを、ここはでき

てないんですってことを、じゃあどうやってこれから伸ばしていきましょうかってことを相談して、じゃあ来学期は次はこういうことをちょっとやってみましょうかってことを話をして、ちゃんと一人一人の成長をサポートしていれば安心して見られる。(炭谷、2015 年 5 月)
協力者っていうか。子どもの成長を一緒に見守っていきましょうねっていう関係。僕らと親御さんがそういう関係で、うまく協力していただけることもあれば、うまくいかない場合もあるけど、メインは子どもを育てること。(炭谷、2015 年 5 月)

「子どもの様子を報告しあう」

ここはスクールの職員室ですけど、勝手にみんなで話している。今日は○○くん、こんな感じやったけどどうしんたんかな、とか。そういう会話は毎日スクールが終わってから、だからもう、自然発生的にずっとやっている。もう、それももうイッツニュー（ラーンネットグローバルスクールの５つの決まりごと）が死語になったっていったのと一緒で、一人一人密っていうのは、うちでは当たり前の日常だから、うちでは全然言う必要がない。(中略)目立つ子だけ見てたらあかんなって。おとなしい子でも元気な子でも、全員をちゃんと見ようねってしたら、そういうことはなくなりましたね。今はもう、当たり前のように、全員が全員のことを良く知っている。(炭谷、2015 年 5 月)
ナビによって、見ているポイントが違ったりするので、一人だけで見ると危険だけど、みんなで見ている。そうすると、あるナビに見えていない側面を、他のナビが見ていて。それをここで話し合って。(炭谷、2015 年 5 月)

インタビュー結果２：ラーンネットグローバルスクール　ナビゲータ（教員）　藤原真季様

①教えるときに大切にしていること

「基礎学力を軽視しない」

授業の中でも基本的な計算とか漢字とか必要ですし、最低限必要な知識はこつこつと。そこは任せるんじゃなくて、これをこれだけ学ばなければならないよってことは提示して。手段はこれだけあるけど、どれでするっていうのは選択できるよと伝えます。こちらが子どもが選択するように準備をします。（藤原、2015 年 5 月）

「学びたい力を信頼する」

学びたいこと、知りたいこと、やりたいことをみんな持っているんです。それは与えられるものじゃなくて、自分が好きなことであったりとか、こういうことに興味があるっていうことを引き金にして、どの分野でも「ここが好きかも」「ここは興味があるかも」っていうことからどんどん繋がっていってますね。そういう、自分で学ぶ力は本当にみんなが持っていて。それは、場があることによって発揮できると思います。（藤原、2015 年 5 月）

子どもたちも話を聞くだけ、授業の中で話を聞くだけよりも「じゃあ実際自分たちでやってみよう」というところになると、本当に活動的で、考えて、動くことが出来ます。自分で学ぶ力はそこから発揮していくんだなというところがすごく分かります。ま、こちらが話を最初のガイドとか話すことは話しますけど、「じゃあそこから自分たちの考えで動いてみて」と言うとみんな動けるんですよね、ちっちゃい子でも、中学生でも。

（藤原、2015 年 5 月）

「発表の機会を与える」

自分で考えて、「次みんなに発表してもらうからね」って言うと、自分の言葉で考えたことを書いて、それを発表してますよ。中には書くことが苦手な子もいるし、話すことが得意な子、話せないけど書いて説明するのが得意な子もいたり、絵のほうが上手な子とか、表現の仕方は人それぞれなんですけど。みんな人に伝えることは大好きなので、授業の中でもそうですけど、探究シェアリング（毎学期ごとに大人の前で探究の成果を発表する会）ではみんな聞いてほしいみたいです。どんな子でも堂々と発表できるのはやっぱりすごいなと思います。

（藤原、2015 年 5 月）

自分のわかったこと、自分の伝えたいことをまとめて、人に説明することによってどんどん自分の中で理解が深まっていっていくみたいです。１回目だけじゃなくて、「次の人にどう言おう」って、考えがどんどん深まっていくんですね。「あ、こうやって説明したらいいんか」って２回、３回やることでどんどん上手になっていくのが傍で見ていて思います。「聞いてよ、聞いてよ」っていうのはみんなあるもので、親にしろ、友達にしろみんな連れてきて、聞いてほしいをアピールしてますね。「見て、見て」っていうのをアピールしたり。私も、私の担当じゃないところも見に行って、こんなん知ったんや、こんなん分かったんやっていうのを知るのも楽しいですし、ただ単にまとめましたってだけじゃく、知ってほしい、聞いてほしいってところを共有できるってところが大切な場かなと思いました。でもプロジェクト学習なんか、本当に自分がテーマを選んで調べたりとか実験したりする中で、最後に発表するんですけど、どんなテーマを選ぶかってところも面白くて、「あ、そんなテーマ選ぶんや」とか「そんなこと知りたいんや」とか子どもならではなんですね。そこは、毎回面白いなあと思って。本当にそこは「聞いてよ、聞いてよ」っていう（笑）子どもによっては、質問によってどんどんハマったりとか、ここ調べてなかったから調べますとか、その２・その３ができていったりとか。ずっと同じテーマをやる子もいるし、どんどん違うテーマ選ぶ子もいて。そこは、やっぱりシェアリングの機会があることによって深まっていきますね。自分の中でどんどん深まっていくんだろうなと思います。（藤原、2015 年 5 月）

「子どもに多数の視点を与える」

色んな手段を提示する、選ばせるっていうところがこちらからできることかなって思います。あとはちょっと最近人数が増えてきたので、子ども同士の関わりを持たせるグループワークとか、子ども同士の話し合いをさせる場を増やすとかを最近は意識しています。前は大人のナビゲータと子どもの関わりが多かったんですけどね。話し合う、相手の話を聞く機会は授業の中にもけっこうありますね。（藤原、2015 年 5 月）

見方が一つじゃないというところですかね。どうしても子どもだけの考えで「こうかな？」っていうのもあるんですけど、それだけじゃなくて、「こっちから見たらこんな考えもあるよ」とか「別の方向から考えてみたらど

うかな」というのを伝えてます。賛成の意見、反対の意見だけじゃないっていうのは本当に日常からあることだと思うで、自分の考えをもちろん言ってもいいし、じゃあ相手の考えも聞いて、理解するという過程には注意していますね。その考えを否定するとか「これは間違いなんだ」じゃなくて、「別の考えもあるよねっていうことを伝えようとしています。（藤原、2015 年 5 月）

みんなで学んでいくっていうのは、一人でやるより楽しいですよね。一人で自分のペースで学ぶ時間ももちろんありますが、テーマは一応みんなで学ぶことにしています。みんなで話し合う時間はあるし、そのテーマに沿って自分は興味があることを調べる時間もあります。それをまたみんなで共有する時間もあるので。一応テーマはナビゲータから提示するんですが、じゃあどんなところを調べに行くとか、どんなことを今回は発表しようか、というのは選択肢はあるんです。「じゃあ、今まで学んだことで一番伝えたいことは何かな」とか「一番伝えたいことは何かな」とかで最後のまとめをそれぞれが考えてほしいところ聞いたりしています。あとは、みんなでやってきた実験だったり、見学に行って見たり、聞いたりっていうのは、クラスで行く事によって一人じゃ分からなかったことも、みんなで行ったから、分かった・知る、っていうことは多いと思うので。それはクラスでやる意義かなと思います。（藤原、2015 年 5 月）

リハーサルを聞いて、「ここはちょっと分かりにくいよ」とか質問してみるとか、聞く立場でアドバイスをします。後は、別の方法もあるよとか、字を大きくするとか、鉛筆で書いてあるのをペンでなぞるとか、分からないところはこういう見せ方があるよねっていうのを教えたりとか。こうすればいいんじゃないっていうアドバイスはするけど、その子がそうするかどうかはその子の自由ですし、「そこはこうしなさい」じゃなくって、そしたら分かりやすいんじゃない？っていう風にアドバイスします。あとは、こんな資料載せたら？とか。もっと、こういうまとめの言葉を入れてほしいとかは伝えるので。そっからどうまとめるかがその子に任せてって言う感じで、こうしなさいっていうのは言わないです。（藤原、2015 年 5 月）

「共感と認めること」

自分の考えを述べることに共感します。特にちっちゃい子に対してですけど。「ああ、そういうところが楽しか

ったね」とか、「そこ頑張ったんだね」とか。認めてあげることによってみんなに分かってもらえたとか。そこは表情に現れるところですし。みんなに気に入ってもらえたっていう安心感に繋がっていくと思うので。

（藤原、2015 年 5 月）

発表はその子のものであって、どうしたいかっていうのはその子に任せたいなと。そのいろんな思いで資料は作っているので、「いや、こうじゃなくて」っていうのは本人は思っているかも。いや、ここはこう思っているからこう書いたんやって言うのは、その場で言ってくれるんで。じゃあ、そうかそうか、じゃあここはこういう書き方もあるんじゃないっていうのを、こっちが一方的に言うんじゃなくて、その子の考えを聞いて改善していくとかを心がけてます。それはやっぱり一方通行じゃなくて話合いの中でよくしていこうってしてますね。

（藤原、2015 年 5 月）

②実際に見られた変化

去年日本語のクラスで、星新一のお話を読んだんですね。中 3 の二人の子はどっちも本が大好きで。でももう一人、中 2 の子であんまり読めない子がいたんです。読む時間もとるんですけど、話す時間もその後とったんです。わいわいがやがやと話している中で、読めない子も話の中でテーマを自ら理解していったと思います。普通中学の授業だったら、主題はこうで、主人公の気持ちはどうですか、って考えていくと思うんですけど、「これって、こういうことやんね」って子ども同士で、今はやっているものと結び付けて理解したりとか。例えば、クラスでの出来事とか、キャンプに行った時の体験と結びつけるとか、そのやっぱり、身の回りに結びつけることによって理解していくみたいです。いろんなところに話は飛ぶんですけど、会話の中でとりとめもなく話していくことによって、自分から本を読まない子も途中から会話に参加して、本の内容を理解していきます。そしたら、本に興味ない子が興味を持って本を読み出しだので、面白いと思って、みてました。(中略) 本当におしゃべりな子がクラスにいたんですけど、本当にわーってとりとめも無く喋るんですよね。でもそこでクラスを巻き込んでみんなと話をするんです。そういった機会から、一人の考えじゃなくて、みんなの考えを聞くのも面白い

ですね。子どもが勝手に共有していくので、こちらから考えを押し付けるのではなく、みんなのそれぞれの考えが聞けるので私は面白いですし、聞いていて、見ていて楽しいですね。（藤原、2015 年 5 月）

③現場での保護者との交流

例えばお迎えに来てもらった時とかだったら、今日こんなふうに楽しんでましたよ、とか、こんなことを言ってましたよとか。こちらから保護者に楽しんでたこととか、頑張ってたところを伝えるようにしていますね。面談も学期に 1 回あるんですけど、こんなこと頑張って、こんな成長がありましたってことを伝えてます。もちろん改善のところもあるんですけど、そこばっかりじゃなくて、頑張ったよとか、こんなことに興味持ち始めましたねって伝えています。明るい話題とか、伸びていったところを強調して伝えるようなことをしています。家だとやっぱり足らないところのほうが目につくと思うんです、実際のところ、そういったことに関してのほうが相談も多いんですけどね。保護者の方は「学校ではこうやって伸びていますよ」って伝えられたほうが安心されると思うので。そちらを強調して伝えています。(中略) 例えば「こういう点をお願いします」とか「宿題の協力の件でインタビューするのをお願いします」とか、テーマ学習、例えば政治学習の中で選挙があったら、「興味を持っているのでそれを一緒に行って下さい」とか。学校では行けない見学施設などに、一緒に行ってくださいとか、サポーターをお願いしています。一緒に子どもの成長を見守っていきましょうっていうことをお伝えしていますね。

（藤原、2015 年 5 月）

事例 3:NPO 法人 cobon によるキッズシティー

NPO 法人 cobon は、2007 年に設立された大阪を中心に活躍する特定非営利法人である。設立当初から、「ミニ大阪」と呼ばれる、子どもの職労意識を確立することを目的とされた、子どもだけで作る街づくりの事業を行ってきた。これは、ドイツのミュンヘンで行われている「ミニミュンヘン」という活動を模している。ミニミュンヘンは、小さな仮設の都市が夏の数週間の間だけ誕生し、子どもがそれを運営していくというものである。これよりも、更に「大阪らしい」要素や、「社会のルールを自ら考えていく」要素を強め、cobon らしい子どもによる街づくり事業を展開している。

＊ミニ大阪は、今は、キッズシティーと別称で呼ばれるため、今回の報告書の中では、キッズシティーを名称として採用する。

ここがそろそろ閉店しそうだったからタイミング、街がそろそろ終わりそうだから、タイムセールをしてこの街の商品を売り切ろうというときに、んで「今からタイムセールです」っていうのを自分たちのお店だけでいうんじゃなくて、テレビ局と連動して、テレビ局のCMに「○○やさんは何時からタイムセール」っていうことをしてもらうことによって、最初お金渡すけど、その他のリターンをもらうぞっていうのは発展型の自己決定ですよね。二日目の午後のほうが増えている。参加する子が段々大きくなって、守破離の離に繋がっていくことが多いっていうのはありますね。

「考える」ということをもう少しブレークダウンすると結局「自分に何ができますか？」を考えるのが大切だと思うんですね。自分が将来できることは何だろうであるとか、自分が得意なことはなんだろう、理系なことが得意なのか、文系なことが得意なのか、あるいは体育会系的なことが得意なのか。それと周りの環境・状況をかけるわけですよ。例えば、たまたまご家族がご商売をされてて、それを手伝える環境がありますよであるとか。それを照らして「今、自分がなにをできるか」であったりとか。まぁその上で自分はこれから何をやっていくかとか。それは当然、自分がこれから何をしていきたいか、っていう思い、考えのところがベースにあると思うんですけれども。

インタビュー結果１：

NPO 法人 cobon　代表理事　松浦真様

NPO 法人 cobon　松浦智子様

□NPO 法人 cobon の経緯

自分でルールを変えていこう、自分たちで社会をつくっていこうっていうことを２００７年からやっていて、実際にルールを変えていったり、遊びを変えたり、遊びっていうものをやってきたんですけれども、それをもう少しそもそも仕事に込める思いとか願いとかにフォーカスをしてきたのが 2011 年。で、それまでミニなんとかって言っていたのを、キッズシティーっていうのに変えてきました。今はどちらかというと、仕事とかを一つ一つの仕事をどう生まれてきたのか、どういう思いをもって子どもがそれをやっていこうと思っているところをフォーカスすることで、単なるまちづくりをしましたとか、単なるその仕事体験をしましたっていうところから、超えて、脱皮していきたいと思っていて、ちょうど考えているところです。（松浦真、2015 年 5 月）

問題意識

東京で３年働いてたんですよ。東京で大学、まず大学時代は夜間大学だったので、昼間仕事して IT でプログラマーとかしながら、システムエンジニアしながら、昼間稼いで（中略）社内の中が高かったら、社内の会社の中で価格が高かったときに、会社の中であーだこーだいいながら、それによって仕事になっている人たちがいるんだな、（中略）一つの商品を出すためにあっちいってこっちいっていく人がいることが、けっこう大企業に支えているところがあるんだなっていうことがわかって。その中のいいところもあって。例えば、その中の一人がいなくなっても、誰かが支えてくれるという良さもあるんですけど、一方でその、誰かが置きかわりがきく大企業的な機能とか、逆に疲弊してしまっている人もいて、「自分じゃなくてもいいんだ」っていうのが諸刃の剣で起きてる。（中略）まぁその合理化とか、本当に必要なことのために組織とかが、変化できなくて、誰かがいるから、それを変革できないっていう状況が、会社の中でも感じられたんですね。（中略）純粋に仕事をしていたら、もっと世の中の数って減る気がしていて、でも減らないのは減らしたくない人たちと、減らしたくない私たちの想いが、実際目の

前で、仕事なくなりますって言われたら、困りますよね笑。（中略）でも一方で子供達にその後言ったのは、やっぱり仕事をつくるという考え自体が大人になるまでに、こう、今日と明日の仕事が変わったら怖いな、不安だなという前提が、私たちの中にあって、それこそ、その考えが教育であったり、教育によって教えられた私たち親の世代の価値観にも影響がでてるので、だとしたらそれを変えていくことが重要なんじゃないかな。だったら子どもたちから、さっきをいった仕事を作るという素直なところにフォーカスしようと言うところがあります。（中略）半分は怒りでしたね。まぁ最初は、だからその会社で大変だったっていうのと、その世の中で仕事をつくる環境とかが、やっぱりなかなか理解されなかったり、無駄な仕事と分かりながらもそのもちろん、急がば回れで遠回りでわかればいいんですけど、それをすることで不正会計とか、要はちょっとおかしな処理の仕方をしていることをわかりながらも、会社でそういう仕事をしていたことがやっぱり大きいなと思ってます。（中略）子どもに一言でいいから、一つの意思でもいいから、自分で仕事を作って、自分が望ましいと思う社会で生きていってほしいっていう思いは、最初は気持ちがあって。（松浦真、2015 年 5 月）

□大人への利点

「街を俯瞰してみれること」

よく言われるのが街を俯瞰してみれるということと、その街を連動して変化させられるができるっていうこと、それが波になって連なって、街全体ががっとを変わっているのを見られるのがいいよねと言われます。あとは、街自体を止めることができるとか、私たちが生きている中で、見れないこと、止めたり俯瞰したり、連動が見れるっていうことって、それを外から見ることもできるし、中に入って何か変えることもできるし、その 2 つの側面があるのはすごいいいよねーとよく言われます。（松浦智子、2015 年 5 月）

なんかここで問題がおこってて、んじゃあっちに何か投入してみようかっていうのが、子供達がやってみて、実際にその通りまちを動かせるので、例えば大人であれば、なんだろう、すごいセオリーオブチェンジだったりとか、システムシンキングだったりとか、そういったのを理論としてまずみて、使ってみて、ここかなって思って、それを試してっていうのに、いろいろその、まず頭で考えるっていうのが必要になるんですけど、いきなり投入したりとかってなかなかまちってできないので、でも子どもたちは、俯瞰して街全体がみえるから、いきなり「ここかな」ってぼんって資本を投入できるので、すごい効果がなんだろう、子どもたちの直観で、セオリーオブチェンジとか、システムシンキングとかを全部飛ばして、いきなり街全体のこのあたりにつっこんだらどうなるかっていうのを可視化できる経験。（松浦智子、2015 年 5 月）

④子どもへの利点

「自分で工夫できることが自信へ」

何していいかわかんないっていう状態が続いてて、でもそれが３０分か１時間一回仕事して、一周回った後から、こういう仕組みなのか！ってわかった後の、自分で工夫して良いんだ、と分かったあとの伸び方がすごいんですね！午前中見た子どもの顔と、午後の子どもの顔が全く違うんですよ。（松浦真、2015 年 5 月）

２日目のより１日目の午後よりも、子供の自己決定の中におけるイノベーション、想定外の自己決定が多いんですね。確率として。この前全部調査したら、普通のいわゆる基本的な行動で、そのちゃんと言われたことやるっていうのが自己決定の中で６割。例えば値段を１００キット（キッズシティーの通貨）ってつけますとか、１００キットもらったら、ちゃんとお釣りをいくら返しますとかっていうことを基本的に、自己決定以外に発展っていうのがあって。発展は、ここがそろそろ閉店しそうだったから、まちがそろそろ終わりそうだから、タイムセールをしてこのまちの商品を売り切ろうというときに、「今からタイムセールです」っていうのを自分たちのお店だけでいうんじゃなくて、テレビ局と連動して、テレビ局の CM に何とか屋さんは何時からタイムセールをしてもらうっていうことをしてもらうことによって、最初お金渡すけど、その以上のリターンをもらうぞっていうのは発展型の自

己決定ですよね。想定外は自分で起業するとか。あと例えば街の銀行が破綻したときに、破綻した銀行を助けるために寄付をし出すっていう女の子がいてて、それを僕も応援をしたいと思った警察が僕たちも公共サービスを始めますみたいなことをいったりとか、ごみ拾いを始めたりっていうので寄付を集めたりとかとか。それは想定外ですね、発展を超えて。それを考えたときに2日目の午後のほうが増えている。つまり、参加する子が段々大きくなって、重なれば重なるほど、守破離の離に繋がっていくことが多いっていうデータは、ありますね。

（松浦真、2015 年 5 月）

スタッフもテキトーに用意したことでものが足りないと焦るんで、何が起こるかっていうと、スタッフがそれに対応できないと、子どもがスタッフをバカにし出すんですよ。自分たちができないんだって。自分たちで勝手に考え始めるとか、その仕事をやめるとか。（松浦智子、2015 年 5 月）

⑤子どもたちのための仕掛け

「手をかけすぎない」

何もちゃんと用意しないんですよ。つまり、最初の段階で完璧な街をつくらない。（松浦真、2015 年 5 月）

テキトーに用意する、大人がテキトーに用意するっていうのがあって、それ全然仕掛けていることというよりは、最終的にそうなってしまう感じなんですけど、時間が足りないとか。物理的な理由、人足りないとかあるんですけど。あの、きっちりと用意しきらないので、例えば2日目お札がなくなるかもしれないくらいの量しか用意しないとか。1日目の夜に、1日目これだけつかったら、明日なくなるのはわかるけど、「もういいや」って、プラスで用意しない。やらないとか。毎回食べ物ブースとかって道具がないとか、材料がないとか。ボールがないとか泡立て器がないとか。（松浦智子、2015 年 5 月）

⑥実際に見えた子どもの変化

多分１００人いたら、２～３％は、街をふらふらしてる子たちがいるってわかって、まちをふらふらしている子たちが、起業したりとか、いろんなことを感じたり考えたりしている子たちがいるんだなってことがわかりました。だから、街の２～３％、ほんとう３人くらいの子たちが、仕事にも馴染めず自分で何かを作ることができない中でも、なんか悶々としながらその場にいるっていう。それはネガティブな意味だけじゃなくて、ぐるぐる回ったあとに起業している子たちもいるから。社会に仕事にありつけていなかったとしても、その社会に存在する仕方を、その子達は模索しているんだとしたら、今こそ、今私たちがフリーターとか仕事についていないこと自体をその、よくないとか悪いとかって考えるんじゃなくて、そういうふうな今の社会に馴染まない生き方をしている人が、なんか違う感覚で、この世の中を見れているのかもしれないとか。だからこどもの様子って、その３パターンくらいに分けられたりすると、ちゃんとやっている子、ちょっとちゃんとやってる子から発展させようとする子、完全に奇想天外な動きをしている子。パーセンテージ的には最初は６０％次は３割、次は１％とかになっていくんですけど、そういういろんな子たちがいて、全部の意味で、良い意味でカオスを作り出しているのかな、という気がします。（松浦真、2015 年 5 月）

インタビュー結果２：天王寺区長　水谷翔太様

□問題意識と協力までの経緯

「周りの環境を見極めて自分ができることを」

天王寺区に限らず、やっぱり日本全国の教育、近年文科省のほうでもいろいろと改革が進んで、まぁ特に英語に力を入れる学校であるとか、科学に力を入れる学校には出てきてはいるわけですけれども、基本的にはやっぱりその、5教科を主体としたスコアとその偏差値でまぁその、能力の善し悪しが決まってしまうというところが、1つの限界なのかなと。全てが全て受験勉強を否定するわけではないですけど、まぁ私も英語ずっと付き合ってやってきましたけれども、んじゃぁ英検1級持っている人が流暢に喋れるかとか、TOEIC900 持っている人が流暢に喋れるかとか、わけではない。スコアでは現れない人間の思考力とか、何かを想像する力っていうのを身に付けさせようと思ったら、やっぱりそれは受験勉強させて、受験をさせるっていうだけではなくて、何か生きた体験をさせないといけないよね、と。ということで、まぁ考える力を身に付ける。つくる力を身に付けるっていうそのキーワードにのっとって、その cobon さんも含め、様々な取り組みをしてきたっていうのはありますね。（中略）なんかやっぱ、自分の資質、自分の将来こうしたい、思い考えも含めて、自分の資質と、まわりの環境・状況を冷静に見極めて、んじゃぁ自分が何を思うか、自分はどうするかということを、やっぱり求められるっていうのを日常化していくことで、まぁそれが板についてまぁ実際、何かを発言したり、何かをつくれる人材とかは、私はもっと増やしていけると思っているので、だから本当に cobon さんがやってらっしゃるようなキッズシティーのような取組っていうのは、もっと日常化してほしい。（水谷、2015 年 5 月）

「考える力をつけるための場」

子どものころってやっぱり自分が世の中の主人公的に、案に思っているところはあって（中略）精神的には、自分がこの人生という自分だけのドラマの主人公を思い込むそのモチベーションは大切だと思いますけれども、冷静に客観的にみたときに、世の中は自分だけで成り立っているわけではなくて、まず家族がいて、職場とか学校の友人・知人がいて、それは同心円状に広がっていくものなので、それを踏まえた上で、自分はこういう貢献ができるとか。あるいは自分はここでは貢献しない、あるいはここで貢献したいところだから、自分はこれがやりたい、やりたくないっていうのを冷静に考えて、立ち振る舞いをすることができる人を増やしていくことが大切だと思う

んです。それはさっきの考える力、つくるちからを別の表現で言い換えたことだと思うんですけど。それを基礎を学ぶっていうことに関しても、キッズシティーは僕は大切だと思いますね。（水谷、2015 年 5 月）

□事業のパートナーとしての評価

「行政事業としてのインパクト」

本当に子どもたちのことを考える力、つくる力に着目してすすめていく教育っていうのは、天王寺は文教地区と教育すでに定評のある地域ですけれども、足りてないところだと思ったので（水谷、2015 年 5 月）

その今までのこの行政がやってきたことのなかで、あまり例を見ない取組みだったんですね。cobon さんたちって。それがひとつ形になりました、と。言う手応えは大きかったですね。それってやっぱりやってやろうという思いは強くありましたけれども、僕は管理職の中の管理職なので自分一人ではできなかったので、松浦さんとかが協力してくれてはじめて、ゼロだったところにイチを落とし込むことができたっていうのがすごい一番手ごたえとして大きかったですね。これがなきゃ、大阪に広げるとか、日本に広げるとかもできないので、千里の一歩からという意味でそれが早い段階で、できたっていうのがすごく私としては非常に嬉しかったことですね。

（水谷、2015 年 5 月）

「NPO 法人 cobon への信頼への評価」

松浦さんの人柄っていうのも大きいですよ、ほんとに。だから、どんな事業であっても、やっぱりその一緒にやる相手に対するやっぱり信頼性というかそういうのがないと、思い切ったことも要求できないですし、その要求に答えてくれる確証もないですから。これは別にその、こういう授業に限らずビジネス全般にいえることなんでしょうけれども、まぁその相手の組織のトップがどういう方かっていうのも大きいと思いますね。

（水谷、2015 年 5 月）

単純に経済合理性では割り切れない分野の事業になってくると思うので、まぁその合理性を超えて、本当にあの人材育成通じて、まぁ大阪の未来、日本の未来につなげていくんだ！っていう問題意識をやりとりの中で、感じられるか、感じれないかっていうところは重要とした要素ですし。また、単純にね、やっつけ仕事でやっていく委託事業者もいるんですよ。そうした中で本当に松浦さんは、問題意識と当事者意識を持ってですね、本当に一緒にやっていく一人の当事者という形で、関わってきてくださろうとしたので、そこですごく信頼できましたね。（水谷、2015 年 5 月）

キッズシティーというのは、その世の中にどういう仕事が必要なのかとか、なぜこの仕事なのかっていうのをしっかりと考えて、子どもたち同士で話し合った上で、「じゃぁその仕事やりましょう！」と。具体的その仕事をどういうふうに組み立てて行きましょうかを考えさせられるので、考えさせられる機会の量としては、やっぱりキッズシティーの方が多いのかな、と。やっぱり、僕はさっきもちらっと申し上げましたように、小学生とか中学生とか、それくらいの多感な時期に、テーマとか絞らず、自由にとことん考える機会っていうのは増やしておくこと、多ければ多いほどいいと思ってるので、それに向けてはやっぱり、このキッズシティーっていうのは、いい事業だなと思いましたね。（水谷、2015 年 5 月）

□行政への変化

「職員の意識変化」

今まで、区役所でこういう事業をやるという機会がなかったので、初めはみんな、戸惑っていた部分もありますけども。まぁでも本当に担当の職員を中心に今では本当に当事者意識をもって、去年の改善点はこれだったから、これは今年度は必ずクリアしましょうとか強い思いでやっているので、まぁ初めの頃はね、「教育は学校に任せたらええやん」という感じはありましたけど、それが少しずつ変わってきたのかなと思って。（水谷、2015 年 5 月）

「未来をみている街としての意思表示へ」

毎年分かりやすい数字っていうのがやっぱり出るものじゃないから、みんなへの、みんなの未来への意志が糾合されないとなかなか事業が加速する原動力にならないわけじゃないですか。今見るんですか？過去みるんですか？年配になればなるほど、過去をみちゃうわけですけれども、未来ばっか見ている人が構成されている街って私は最強だと思うんです。それはそこの土地、土地の産業とか、街づくりとか、役所の事業にも表れると思っていて、そういう未来へ向けた人材投資の事業がその多分に担保されて、継続されている街っていうのは、その街の人たちへの未来への意志の現れであると、自信をもって、やっぱりチャレンジしていきたいなと思いますね。

（水谷、2015 年 5 月）

その他

国際バカロレア（IB: International Baccalaureate）とは、国際バカロレア機構（本部ジュネーブ）が実施する国際的な教育プログラムである。この機構は、1968 年にインターナショナルスクールの卒業生の卒業後の進路を確保するとともに、学生の柔軟な知性を育てることと、国際理解を促進する教育を行うことを目的に発足された。

国際バカロレアの使命は、「国際バカロレアは、多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成を目的」としている。更に、「この目的のため、国際バカロレアは学校や政府、国際機関と協力をしながら、チャレンジに満ちた国際教育プログラムと厳格な評価の仕組みの開発に取り組んでいます。国際バカロレアのプログラムは、世界各地で学ぶ児童生徒に、人がもつ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれの正しさがあり得ると認めることのできる人として、積極的に、そして共感する心をもって生涯にわたって学び続けるよう働きかけています。」と国際バカロレア機構は発表している。

国内で開設されている国際バカロレアのプログラムには、小学生の年齢に対応される、プライマリー・イヤー・プログラム（PYP）と、中学生向けのミドル・イヤー・プログラム（MYP）と、高校生を対とするディプロマ・プログラム（DP）の3種類がある。日本では、英語の授業と英語試験のみで行われていた国際バカロレアであるが、平成26年度には国策として、文部科学省が国際バカロレア認定校を２００校に増加させるという策を打ち出したことを踏まえ、ディプロマ・プログラムの一部を日本語でも実施可能とする「日本語 DP」の開発・導入が始まった。平成２７年7月1日現在、国内の国際バカロレア認定校は、３５校である。（うち DP 認定校は２６校）

IB生は、実はまだ日本にほとんどいないですよね。学校が少ないですから。実はIB学習者像というものがあります。学習者像全般を見て、おそらく反対される方は、教育者ではいないと思うんです。ただ、そのよく聞くのはですね。その、例えば先生たちの中でも、例えば国際バカロレアの授業ができるようになるのかと、IBの場合は、先生はteacherではなくて、ファシリテーターなんですね。基本的には全部自分が教えるというものではなくて、生徒たちが学んでいくところを手助けする役割になるわけです。そうすると、学校の先生からすると、まぁこれまでやってきたこととは変わってしまうわけなので、そもそもそういうことをできるようになるのか、できないのではないかと思ってしまうので、実際にやってみようかというところまで理解をもらうのが大変であるとお聞きすることがあります。

私もよく経験ありますけど、１日授業をうけているとなんか気が抜けてきますよね。国際バカロレアの場合、生徒は授業を聴くというよりも、参加するという形になるので、疲れはするでしょうけど、自分のような生徒はあまりいないですね。ただなかなかハードなものであると思うので、普通の高校もそうですけれどもフォローみたいなこととかはIB校は非常に必要かなと思います。先生たちも相当疲れると思いますね。非常に準備が大変そうだなという感じがあります。中には、なかなかついていけなくなる子供であるとか、やはりプレゼンをするということを繰り返すと自信をなくしたりとか、いろいろとやっぱり、いろんなことがあると思うので、しっかりとそこは、放任ではなく、フォローが必要ですね。ちょっと難しい状況に陥ったら、むしろそこは普通の高校よりもちゃんとやらないと厳しいかなと。だから人数が他の高校よりも少ないというのはあると思います。

インタビュー結果：文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室　小林克嘉様

□導入された経緯

「グローバル人材育成」

元々グローバル人材というか、そういうのを育てたいというのは正直、昔からある（中略）元々英語力をもう少し付けたいというような考えもあれば、点数がよければ海外大学への留学もできるわけなんです。海外にも進出できるような人材を育てたいというところですね。一番のところは国際的に見ても、国際バカロレアの教育はまさに海外でも取り入れられていて、まぁ海外のグローバル人材はこういう内容を勉強してきているので、そういうことを基本的に取り入れようというところもあります。（中略）英語だけをできるようにするものでは当然なくて、今でもそうなのかもしれないんですけど、例えば子供が日本の会社に入ったとしても、会社は日本にあるかもしれません。そこでは、海外の会社とやり取りをしていたり工事を海外でやったり、従業員の中で、外国人の方がいたり、ドメスティックな会社に見えても、グローバル化が進んでいることはあります。そういうグローバル化に対応できるようなそういうところに目を配れる人間が必要であると。そういうことをやっていかなきゃいけないということが背景としてあって、その中でグローバル人材育成のいくつかやっている中で、（国際）バカロレアも入ってきますというところがある。（小林、2015 年 7 月）

「学習指導要領との一致」

まず国際バカロレアの持っているこういう教育のあり方というのが、（中略）学習指導要領とか従来目指しているものと比較的一致する。もともと考える力を養いたいとかはそういうことは昔からあるわけです。ただその、どういうやり方でその能力を身に付けさせるかはみんな悩んできたわけですけれども、比較的（国際）バカロレアの目指すところは、学習指導要領が目指すところと合致するのではないかと。自ら考えるとか、人の意見を踏まえて自分の意見を発表するというのは、ぜひ行っていきたいところだったので、まずは両者の目指すベクトルが一致します、と。（小林、2015 年 7 月）

「時代の変化に伴う柔軟な対応力」

これからの 30 年間で既存の職業の 60 パーセントがなくなるのではないかとアメリカでは言われている状況の中で、我が国も同様のことはあり得ると、だから、より一人一人の子供たちが主体的に積極的にチャレンジしながら、クリエイティブな、そして人としての感性・感覚を育むような教育が必要になるということです。自分も今 40 歳なんですけど、IT の仕事ってなかったですね。私たちが子ども頃は。同じようなことは子どもたちにも言えるので、昔の昭和の頃っていうのはとにかくマニュアルをとにかく覚えれば、社会で通用していく時代だったと思いますけれども、そういう時代じゃなくなってきましたから、新しいことが起きてきた時に何か柔軟に対応できるっていうのがすごく必要ですね。まぁ、何十年かすればその今の世界中のバランスが当然変わってきますから、そうしたときにしっかりその、国家公務員の立場からいうと日本をちゃんと反映させていけるような人材が育ってこないと困るので、そういう変化に対応できる人。（小林、2015 年 7 月）

②学習者像と教師像

「学習者像」

IBの学習者として、私たちは次の目標に向かって努力します。

探究する人
私たちは、好奇心を育み、探究し研究するスキルを身につけます。ひとりで学んだり、他の人々と共に学んだりします。熱意をもって学び、学ぶ喜びを生涯を通じてもち続けます。

知識のある人
私たちは、概念的な理解を深めて活用し、幅広い分野の知識を探究します。地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組みます。

考える人
私たちは、複雑な問題を分析し、責任ある行動をとるために、批判的かつ創造的に考えるスキルを活用します。率先して理性的で倫理的な判断を下します。

コミュニケーションができる人
私たちは、複数の言語やさまざまな方法を用いて、自信をもって創造的に自分自身を表現します。他の人々や他の集団のものの見方に注意深く耳を傾け、効果的に協力し合います。

信念をもつ人
私たちは、誠実かつ正直に、公正な考えと強い正義感をもって行動します。そして、あらゆる人々がもつ尊厳と権利を尊重して行動します。私たちは、自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもちます。

心を開く人
私たちは、自己の文化と個人的な経験の真価を正しく受け止めると同時に、他の人々の価値観や伝統の真価もまた正しく受け止めます。多様な視点を求め、価値を見いだし、その経験を糧に成長しようと努めます。

思いやりのある人
私たちは、思いやりと共感、そして尊重の精神を示します。人の役に立ち、他の人々の生活や私たちを取り巻く世界を良くするために行動します。

挑戦する人
私たちは、不確実な事態に対し、熟慮と決断力をもって向き合います。ひとりで、または協力して新しい考えや方法を探究します。挑戦と変化に機知に富んだ方法で快活に取り組みます。

バランスのとれた人
私たちは、自分自身や他の人々の幸福にとって、私たちの生を構成する知性、身体、心のバランスをとることが大切だと理解しています。また、私たちが他の人々や、私たちが住むこの世界と相互に依存していることを認識しています。

振り返りができる人
私たちは、世界について、そして自分の考えや経験について、深く考察します。自分自身の学びと成長を促すため、自分の長所と短所を理解するよう努めます。

「生徒に対する社会からの評価」

国際バカロレア生というのは結構、これはよく評価されるところで、大学に入ってからが評価されることが多いと。課題解決能力であるのとかは、むしろ大学とかで勉強とか、その後の人生とかも生きてくる能力でもあるので、アメリカとかの大学で国際バカロレア生のほうが大学生の成績がいいよくと聞くんですね。（小林、2015 年 7 月）
生徒に求められるのは、まぁ日本語であっても物事をまず考えてまとめる能力であったりとか、発表する能力、わかりやすく伝える能力は非常に高くなると思いますし。英語以外の 1 科目は英語でやらなくてはいけないんですよ、最低一科目はですね。英語でやれば、その例えばこの授業を全部英語でやりますよとなれば、英語の会話力とかも、これは副次的なものだとは思うのですが、高くなることも期待できるかなと。（小林、2015 年 7 月）

「生徒にかかる負担」

ただなかなかハードなものであると思うので、まぁその、普通の高校もそうですけれどもフォローみたいなこととかは非常に IB 校は非常に必要かなと思います。相当疲れると思いますね。準備が多分、非常に大変で準備が大変そうだなという感じがあります。（中略）なかなかついていけなくなる子供であるとか、やはりプレゼンをするということを繰り返すと自信をなくしたりとか、いろいろとやっぱり、いろんなことがあると思うので、しっかりとそこは、当然そこは、放任ではなくて、ですね。ちょっと難しい状況に陥ったら、むしろそこは普通の高校よりもちゃんとやらないと厳しいかなと。だから人数が他の高校よりも少ないというのはあると思います。（中略）生徒たちも、教科書だけ読めばいいわけじゃないので、参考図書とか読まなくてはいけないので、そういう準備がはやり大変ですかね。その聞いていけば時間が過ぎていくものでもないので、必ず役割というか、そういう授業の中でも決まっていくものなので、準備も大変だと思います。（小林、2015 年 7 月）

「教師像」

国際バカロレアでは、教師をティーチャー（教える人）と呼ぶのではなく、ファシリテーター（物事を容易にできるように促進する人）と呼ぶという。

> 基本的にはこれを全部自分が教えるというものではなくて、生徒たちが学んでいくところを手助けする役割になるわけです。（小林、2015 年 7 月）

「ファシリテーター」

> 生徒たちは、例えばあるテーマが与えられましたというときに、大体 5 人×5 のグループにわかれ、当然予習してこないと、授業ついていけないんですけど、あるテーマについて 5 人のグループで議論をしますと、これを 1 5 分くらいやるんですね。そして、これをシャッフルするんですね。シャッフルして、例えば新しくなったグループの中でこの A グループにいた、最初に A グループにいた子に、前のグループで結論で、どういう考えをしたのかをまたグループ内で発表してもらうと、そして次の課題をとそれを繰り返していくんですね。日本の高校っていうのは、まぁ、実際にこういうことをやっている高校もあると思うんですけど、基本的には先生が教えると思うんですね。なので歴史の授業であれば、先生が教科書に沿って教えていくと、先生がある問題に関して先生が指名して答えるというんだと思いますが、この場合ですと先生の役割としては、課題を与える。課題をどういうふうに設定するかっていうのが先生の腕という形ですね。あとはいかにこの、有機的に授業が展開できるかっていうところが先生の腕になりますね。だからそのわかりやすく教えるとかも当然重要なんですけれども、アウトカム、アウトプットをどのくらい授業の中で出すことができるか、というのが先生には求められてくるという形だと思います。（小林、2015 年 7 月）

③経済界からの評価

> やはり経済界の中では、企業で働いてくれる人材とかになるので、そこの例えばこちらにありますように、コミュニケーション能力とか、異文化を受容する力、論理的思考力、課題発見能力。特に言われるのは、課題、論理的

思考力とか、やっぱりこういう人材が企業側も欲しいと。ということなんだと思うんです。語学力もふくめでですね。（小林、2015 年 7 月）

小林さんから頂戴した資料の中から、いくつか日本経済界の団体連合会からの提言を抜粋する。

「語学力のみでなく、コミュニケーション能力や異文化を受容する力、論理的思考力、課題発見力などが身に着く国際バカロレアディプロマ・プログラムは、グローバル人材を育成する上で有効な手段の一つである。」

「ディプロマ・プログラム取得者に対する社会における適切な評価も重要であり、大学入試における活用や、企業も採用時や人材活用において適切に評価することなどが重要である。」

「我が国においても、入試の際、TOEFL や TOEIC などの英語能力の４技能を測定できる外部試験を活用することや、入試において国際バカロレア資格を活用する大学を拡大することなども検討すべきである」

（「世界を舞台に活躍できる人づくりのために」―グローバル人材の育成に向けたフォローアップ提言―より）

④課題点

「マニュアルがないことによる手順の不明確さ」

多くの人の国際バカロレアが何かをわかってもらうことが非常に苦労します。検討段階からちょっと進んで、学校を作ろうかということになると、ひとつ悩みになるのは、これは日本の文科省が認可するものではないので、国際バカロレア機構が認可するので、なんというかマニュアルみたいなものがない。国際バカロレアの世界が、ちょっと特徴的なのは簡易マニュアルそういうものは基本的にあんまりつくらないんですね。多くの文書とかを元にベストなものを自分で考えるというのが本筋なんですけど。ただ、お忙しい学校の先生からすると、ちょっとなかなかそこまで大変なので、実際手順がよくわからないというのはよく聞きますね。さらに段階が進んでいくと、予想していないような出費だったり、人的・物的なものがあり、出費が生じるので、特に公立であればそういう予算を

つけるところ、私立だったら法人の中の財務をやる方にたいしてどう説明するかが困ったところになると。この話は先ほどのマニュアルの話と同じなんですね。まだまだ日本に根づいてきてないものなので、そこらへんにちょっと困るというのは、ある。（小林、2015 年 7 月）

「英語力」

基本的に英語なので、どうしても英語が得意な先生がやることになってしまうんですね。なので、学校とかに行くと、大体担当というか、事務的にやる担当の先生は、だいたい英語の先生に、必然となってしまう。あの、だから日本語化がまだまだちょっと、文科省の中で必要文章を日本語化してきてはいるんですけど、文科省は知りようがないものがあるんですね、認定しようとする学校だけがもらおうとするものがあるので、そういうものはちょっと私たちは持ってなかったりして、そういう文章を読みこなす力が先生にもちょっと求められる。当然、学校も教育委員とかもかも役所的な組織なので、どうせ上の方に説明するときは、また日本語の文章を作らなくてはいけないのでその辺は大変だというのは結構聞きます。（小林、2015 年 7 月）

「ファシリテーター育成機会不足」

国際バカロレアの（ファシリテーター育成用の）ワークショップというのは英語しかないので、参加料が高かったり、日本であんまりやっていないこともあります。これをもう少しに日本で開催して、その先ほど校長だったり、あといわゆるガバナンスをする人たちに対して、こういう研修の機会をもうちょっと多く、あとお金をちょっと安くしていくことが必要かと。今は、日本でないことも多いので、中には外国に行かない、中国のマカオとか香港にいったりしていますので、それはお金もかかりますし、日本語しかできない先生だとちょっとしんどい、それは。日本語で日本でやれるようにすると、考えられる。（小林、2015 年 7 月）

先生のところは、成功事例のとこか、今までやってきている成功事例というか、こういうふうに確保してきましたっていうのを共有するしかないかな、と思っていて。逆にいちばん良くないのは、学校の間で取り合いをしちゃうと、これはただ単に先生の給料があがるだけになっちゃうので、それはよろしくないと思うんですね。いちばんいいのは英語も含めて、本来日本人が英語もできるといいです。日本語もできるわけなので。今実は大学でそういう先生を養成する動きもあるので、実はこれ、ちょっと大学国際バカロレア教育を認定する仕組みっていうのも、認定校があるのと同様に、まぁこれもマニュアルの整備かなと思う。（小林、2015 年 7 月）

「資金に関しての誤解」

まだ学校が少ないこともあって、非常にその、誤解を非常に生んでおります。要するに、国際バカロレア機構から聞く数字では数百万でもいいという話があるかが、これでは認定まで数年かかりますから、そんな大きな数字ではないという印象があるものの、学校によっては、数千万というところもある。すごく差があるんですよね。学校の中には、国際機関から、認定にあわせて校舎の改修をしたりするんですね。お金がかかって大変だと、それで、まずやろうと思わなくなるので、今後は、文部科学省の名前である程度、認定までの手順っていうものをちょっと整理して、とにかく今後手を挙げたい学校へ周知して、正しい情報をお知らせしいかないとならないかなというところがございます。（小林、2015 年 7 月）

「私学からの相談機会のチャンス不足」

私学の方ですと文科省に相談するとかはですね、なかなかですね、私たちはそう思ってないんですけど、難しいと思われてしまいます。関心校をもうょっと掘りおこしていかないと私学を含めてですね、全部煮詰まってから相談するっていうところがやっぱり多いんで、ちょっと日本的なんですけど、まぁ、ちょっとそういう外国とかみてると、案段階からどんどん申請して、手を挙げていってるんで、そういうところまで生真面目にやらなくてもよさそうなものでもあるので、できるだけ関心校を掘り起こしていくこともやっていくと。（小林、2015 年 7 月）

⑤普及に関しての展望

よくエリート教育だとよく言われるのですけど、まぁそうは思っていなくって、高校生の中でもすごくできる子は別に、国際バカロレアをやらなくてもいいと思います。正直なところ。それは国際バカロレアじゃなくても、普通の高校でもそういう子は伸びていくと思います。でも国際バカロレアのような教育方法であれば伸びるような生徒さんがやっぱり来てってなると、その一種の多様性教育になると思うので、そういう道が一つできるといいかなと思うんです。こういう教育が得意な子って多いと思うので、発表するとかですね。多くの才能を伸ばすという観点でも、やっぱり２００校という、いろんなところにできて欲しいなと。あとは公立ですね。授業料がやっぱり安くすみますので、いろんな子が、受けいれには公立で導入が進むことが必要かと思います。 （小林、2015 年 7 月）
中学生くらいの立場にたってみると、選択肢が広がること国際バカロレア導入のメリットだと思います。このそういうもし高校を卒業して、大学の時まで考えて、海外に行きたいという子もいるでしょうし、こういう勉強が面白いというお子さんも当然いると思うので、どういう地域でも、こういう選択肢が用意されていますというのが、200 校になって、実現ができるといいかなと思います。いまの段階では、ない県のほうが圧倒的に多くて、東北とかご覧いただくとわかるように、１校あるのみです。その他、東北であるとか北陸にもありません。九州も福岡しかありません。こうした国際バカロレア校がない地域もあるのでそれをなくしたいなと思っています。 （小林、2015 年 7 月）

参考文献一覧

筧裕介『ソーシャルデザイン実践ガイドー地域の課題を解決する7つのステップ』2013年　英治出版

西條剛央『ライブ講義・質的研究とは何か（SCQRMベーシック編）』2007年　新曜社

西條剛央『ライブ講義・質的研究とは何か（SCQRMアドバンス編）』2008年　新曜社

佐藤郁哉『フィールドワークの技法―問いを育てる、仮説をきたえる』2002年　新曜社

炭谷俊樹『第3の教育』2000年 角川 one テーマ21

宮本常一、安渓遊地『調査されるという迷惑―フィールドに出る前に読んでおく本』　2008年　みずのわ出版

ロバート・K.イン『新装版ケース・スタディの方法（第2版）』　2011年　千倉書房

Robson, C. 2011. *Real World Research.* New Jersey: Wiley.

ラーンネットグローバルスクール　ラーンネットグローバルスクールについて　http://www.l-net.com/about/　（参照　2015-08-21）

東京コミュニティースクール　東京コミュニティースクールとは

http://tokyocs.org/0130_aboutus/npo_3.html　（参照　2015-08-24）

NPO法人　cobon会社概要　http://cobon.jp/company/company_comment.php　（参照　2015-08-25）

文部科学省　国際バカロレアの理念　http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/1353422.htm

（参照　2015-08-27）

文部科学省IBの学習者像

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/ib/__icsFiles/afieldfile/2015/02/09/1353422_01.pdf　（参照　2015-080-27）

4、公開型ワークショップ

4−1　公開型ワークショップの目的と構成

公開型ワークショップは、①連続型ワークショップへの参加者となる母集団の形成（富士通グループ社員、横浜市民）、②"新しい力を育む学び"を実践する先駆者からの暗黙知の共有、③富士通グループ社員、横浜市民の課題意識の収集、④富士通グループ社員、横浜市民の立場や職種、セクターを超えた関係性の構築、④富士通グループ社員、横浜市民の立場や職種、セクターを超えたアイデアの創発、を目的に設計された。

ワークショップの構成は、前半後半の２部から成る。前半は、"新しい力を育む学び"の先進的実践者から事例及び、実践の中に埋め込まれた暗黙知を共有してもらい、未整備な分野である"新しい力を育む学び"への理解を高めることを目指した。後半は、参加する富士通グループ社員、横浜市民から各回 10~20 の課題意識を募集し、課題意識を提出した富士通グループ社員、横浜市民それぞれごとにグループを形成。各グループに対して、グループの課題意識に関心を持つ他の参加者（課題意識を提出した参加者以外の参加者全員）が４人１組となるように集まり、課題意識に対する解決アイデアを持ち寄るディスカッションを実施。さらに、課題意識を提出した参加者を残し、その他のグループに参加する参加者を入れ替えて課題意識に対する解決アイデアを持ち寄るディスカッションを実施した。

また、ディスカッションを自発性を基盤に形成するため、各グループにはグループごとのファシリテーターは配置せず、3 つのルール（①グループ人数（最大４名）、②グループ替え（25 分毎、計１回）、③課題意識の提出者は、ディスカッションの冒頭で課題意識の背景を共有し、またその他の参加者はなぜこのグループを選んだのかを共有する）によって円滑なでディスカッションが自立して行われることを支えるようにした。

尚、NPO 法人ミラツクがワークショップの進行と、報告書掲載のための資料提供を行った。

4−2　各回の概要

4−2−1　第一回公開型ワークショップ

日時 : 2015 年 5 月 26 日(火)　18:30- 21:20

参加者 : 63 名　(民間４３名、行政９名、市民/市民活動７名、学生４名)

ゲスト : 市川力氏(特定非営利活動法人　東京コミュニティースクール　探究プロデューサー)

東京都中野区にある小学生を対象とした探究型学習を行うフリースクール。現在では、初期の頃のスクール卒業生が大学生になる等、10 年間の成果を積み上げている。「○○の授業始めます」「終わります」というのではなく、「○○の探究始めます」「終わります」ということとはどういう意味なんだろうかと市川先生は問う。東京コミュニティスクールでは、3 ヶ月 1 回のサイクルでフィールドワーク、調べもの学習、プレゼンテーションが行われているという。中野のフィールドワークを例として、市川先生は探究型学習を説明した。「中野は飲み屋が多い街→だから、普通だったら接点がないような人たちと出会ったりする→いかにこの街にどのような特徴があってこの街の特徴を生かすにはどういうことがあるんだろうということを考える→「なんで、大人は、ここまでお酒を飲まないと家に帰らないのか」→小さな飲み屋さんがたくさんある→子どもにもこういう街がたくさんあったら？→大人が飲み屋だったら子どもにとっては駄菓子屋かもしれない、二軒目行きたいですよね」という経緯で学習が進み、新しいアイディアが生まれていくそうだ、探究型学習では、ある一つの事象を決めつけたら、「根拠はなんだ！」と言われるので、決めつけないことも重要視する。その結果、あきらめない心や俯瞰する力が身に付くと市川先生は話す。

ダイアログの様子

参加者によって挙げられたテーマ／トピック

１：家庭に親の教育の関わり方
２：企むということは個人なのかチームなのか
３：都会でのコミュニティスクールの価値
４：義務教育における外国語教育
５：リタイア世代の学び直し
６：いびつな人を活かすために普通の人が出来ること
７：大人を子どもらしくするには
８：変化することを恐れない人をどうやってつくるか
９：小学校の子どもが毎日宿題をしない。塾に入れる？
１０：子ども探究心に火をつけるには？
１１：過疎地における学校教育のあり方
１２：引きこもっている人との接点のつくり方
１３：企業の人を対象に、親向けのワークショップをするには？
１４：子どもが楽しく学ぶために大人はどう関われればいいか？
１５：指導者の存在感は大きい方がいいのか、小さい方がいいのか

4−2−2　第二回公開型ワークショップ

日時 : 2015 年 6 月 1 日(月)　18:30- 21:30

参加者 : 93 名　(民間６１名、行政１２名、市民/市民活動８名、学生１１名)

ゲスト : 上田信行氏（同志社女子大学現代社会学部現代子ども学科特任教授/ネオミュージアム館長）

現在、上田先生は同志社女子大学の特任教授として教員志望の学生たちを指導されている。大学の時にセサミストリートに出会い、Formative Research Form といったものをつくる研究を目の当たりにされた。それは、テレビを作るためのリサーチで、特にその当時は、ラピッドリサーチといってスタジオの中で様々試してみるリサーチが行われていたところだったという。上田先生は、「セサミストリートの制作スタジオの中は、みんな温かく感動したことも一つの経験だった」と話す。そこで、上田先生は「これがワークショップだ！」と思ったという。「教育の中でワークショップを使って、あのスタジオみたいなやつをやろうぜ！」と考え、新しいものを生み出す、実験的なものがワークショップであるという仮説のもとで、日本での実践をスタートさせる。上田先生は「やっぱりチャレンジすることが一番大切」と語る。チャレンジはリスク。でもそのチャレンジは、伝染していく。でも、そのチャレンジは、どう変わるかわからない。それこそ、そこで必要なのは、プレイフルエンバイロメントであると上田先生は強く話した。そこで、「仲間とやってみようぜ！」「一緒に考えてみようぜ！」が大事だと上田先生は締めくくった。

ダイアログの様子

参加者によって挙げられたテーマ／トピック

１：経験を言葉にするには？
２：地方創生にむけた学び
３：企業におけるワークショップ型学びの価値
４：なぜ失敗を恐れる社会になったのか？
５：大学でまなんでいることが仕事にならないのか
６：作ったものをみせるステージをどのようにつくればいいのか？
７：子供たちが町をつくる新しい学び方
８：それぞれのフィールドでメタ認知をどのように実践しているのか
９：大人をどう学びに向かわせるか
１０：いつから英語教育をはじめたらいいのか？
１１：大人や高齢者のプレイフルラーニング
１２：大学生の方が、ぜったい受けた方がいい授業は？
１３：都市部と地方の方との学びの差について
１４：プレイフルなお年寄りが活躍できる社会をつくるには
１５：横浜にこどもがワクワクする小学校をつくるとしたら？

PLAY
PLAY

4−2−3　第三回公開型ワークショップ

日時 : 2015 年 7 月 7 日(火)　18:30—21:30

参加者 : 90 名　(民間５９名、行政１５名、市民/市民活動８名、学生８名)

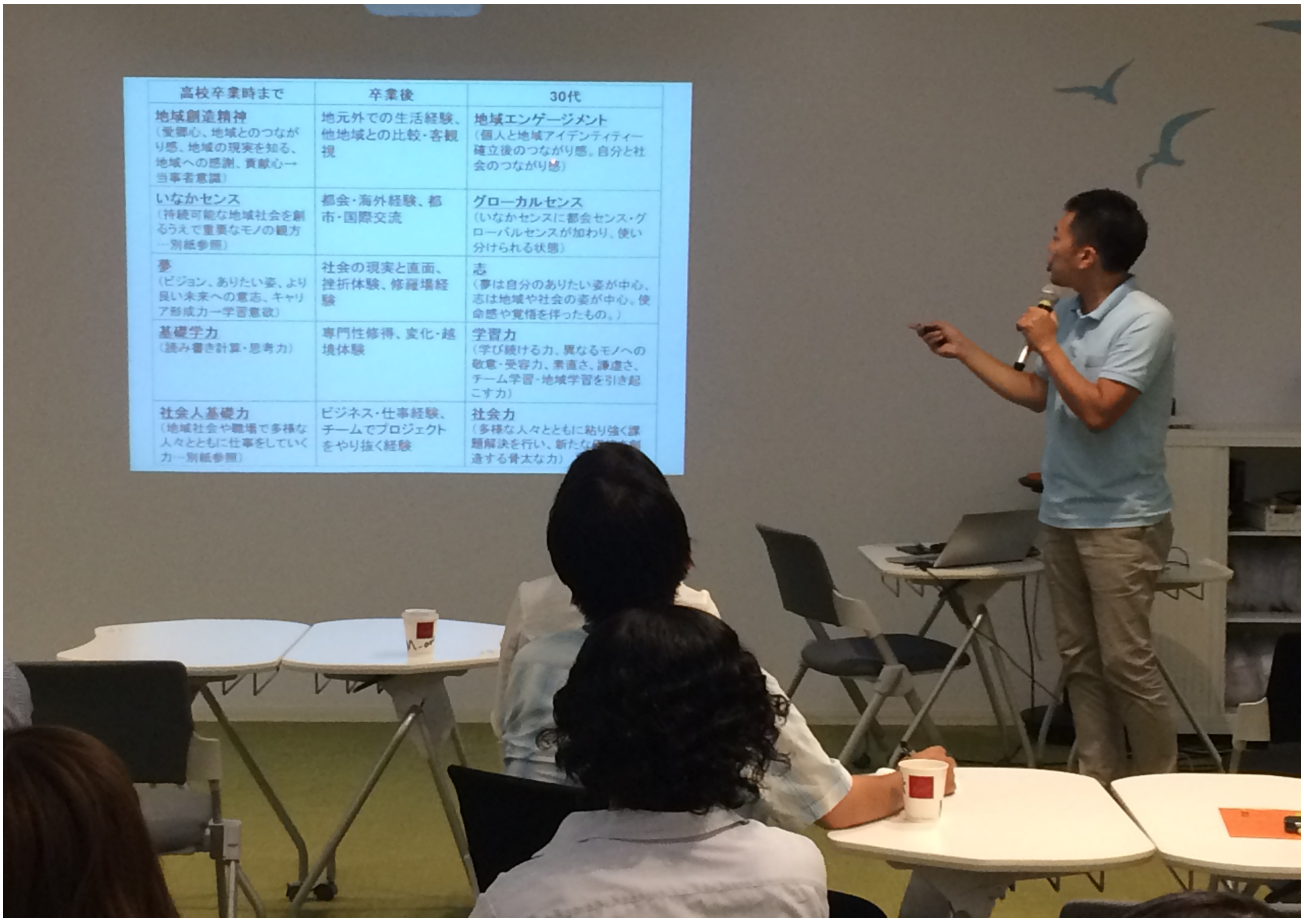
ゲスト : 豊田庄吾氏（隠岐國学習センター長）

豊田さんは、人口 3,000 人の離島、島根県海士町で行われている町営塾の取り組みを紹介してくださった。 塾の対象は島内の高校生で、2009 年に出前授業として開始。主なプログラムは、「夢ゼミ」と名付けられた、自分の将来やりたいことを模索するプロジェクト型学習。１年時 : 対話の型を学ぶ、２年時 : 地域の課題を学ぶ、３年時 : プロジェクト学習と組まれたプログラムを通じて、自分と違う考えの人を受け止めながら「納得解」を目指していくことに取り組んでいるそうだ。例えば、高校一年生時に、「酪農は JA がダメにしている」と言っていた生徒が、先駆的な取り組みをしている JA の方とスカイプでヒアリングする等をしてプロジェクトを前進させたという。その他にも、海外事例を基にした IT 技術によって補完されるスマートファームの構想を立案するなど、3 年間の間に様々なネットワークを提供しながら生徒のプロジェクト型学習を支援されているという。豊田さんは、進学率の高さや、進学者数アップを目標にはされていないが、慶應義塾大学等トップクラスの大学まで進路選択の幅も広がるという結果が出てきていると話された。このように、「自分がしたいこと」と「地元のために何ができるか」という円の交点を見ながら、海士町でしか育てられない人材を育成されている。

ダイアログの様子

参加者によって挙げられたテーマ／トピック

１：小学、中学受験は必要なのか？
２：社会的経済的影響への解決策
３：学校外にまなびの場を広げよう
４：学校外の方がのぞむこどもの学ぶ力
５：廃校、または分校になってしまう、どうすればいいか
６：こどもたちが主体性をもつ授業とは
７：オンライン社会見学への可能性
８：学んだことが応用され続けるには？
９：横浜のこどもたちが自分ごとにできるには
１０：自己を肯定する力をつけるには


高校卒業時まで
卒業後
30代
地域創造精神
（愛郷心、地域とのつながり感、地域の現実を知る、地域への感謝、貢献心ー当事者意識）
地元外での生活経験、他地域との比較・客観視
地域エンゲージメント
（個人と地域アイデンティティー確立後のつながり感。自分と社会のつながり感）
いなかセンス
（持続可能な地域社会を創るうえで重要なモノの観方ー別紙参照）
都会・海外経験、都市・国際交流
グローカルセンス
（いなかセンスに都会センス・グローバルセンスが加わり、使い分けられる状態）
夢
（ビジョン、ありたい姿、より良い未来への意志、キャリア形成力ー学習意欲）
社会の現実と直面、挫折体験、修羅場経験
志
（夢は自分のありたい姿が中心、志は地域や社会の姿が中心、使命感や覚悟を伴ったもの。）
基礎学力
（読み書き計算・思考力）
専門性修得、変化・越境体験
学習力
（学び続ける力、異なるモノへの敬意・受容力、素直さ、謙虚さ、チーム学習・地域学習を引き起こす力）
社会人基礎力
（地域社会や職場で多様な人々とともに仕事をしていく力ー別紙参照）
ビジネス・仕事経験、チームでプロジェクトをやり抜く経験
社会力
（多様な人々とともに粘り強く課題解決を行い、新たな[illegible]通する骨太な力）

4−3　あしたのコミュニティラボ掲載記事一覧

◯第一回公開型ワークショップ

「グローバル時代をしなやかに生きるために必要な『探究力』――よこまなプロジェクト第１回公開ワークショップレポート」

http://www.ashita-lab.jp/activities/5339/

（概要）

一回目のレポートの中では、市川先生のスクール運営に対する姿勢と考え方が主に触れられている。アメリカでの学習塾経営の経験を生かし、東京コミュニティースクールの校長に就任した市川先生。「『基礎学力は大丈夫なの？』とバッシングを受けましたね。しかし、それから１０年経って、社会がさらに複雑化したことで、正解のない不透明な世界を逞しく、しなやかに生きる力が求められ、私たちの活動に対する世間の見る目も変わってきました」と市川先生は、説明する。市川先生は一貫して、「子どもの個性を伸ばすことは正しいことである」と話し、突出した才能を伸ばすようなことではなく、みんなで知恵を絞りあい、協働して何かを作り上げることこそ重要であると強調した。

◯第二回公開型ワークショップ

「学びの未来はエンターテイメントとともにあるーーよこまなプロジェクト第 2 回公開ワークショップレポート」

http://www.ashita-lab.jp/activities/5403/

（概要）

二回目のレポートの中では、上田先生が紹介した「The Spirit of YET」が紹介されています。アメリカのセサミストリートの製作現場で刺激を受けた上田先生。日本ではプレイフル、つまり「人々が集い、ともに本気でものごとに取り組む中で起こるワクワク感溢れる学びをさす言葉」を使って実践を続けてこられた。自ら行動していくためには、「多様な状況の中で対話を通してメタ認知を鍛え、年齢や立場を理由に現状維持を選ぶのではなく、常にThe Spirit of YET(まだまだの精神)を持ち続けることが重要」だと上田先生は強く訴えた。

◯第三回公開型ワークショップ

「グローカル人財に必要な２つのセンスーーよこまなプロジェクト第 3 回公開ワークショップレポート」

http://www.ashita-lab.jp/activities/5539/

（概要）

第三回目の記事では、海士町という日本海に浮かぶ小さな島の町の存続と人材づくりを行っている豊田さんの、グローカル人材育成の観点がちりばめられている。人口減少が進む地方で必要とされている人材は、生きていけるだけの収入が得られる仕事と、既存産業を再生させることで生み出される仕事を作り出せる人材と、豊田さんは熱く語る。地域と密接している海士町での教育は、「‘島ならでは‘の教育が何であるかを考えていくと、やはりリアルな土地、そしてそこに住まう’人‘という存在を無視することはできません」と豊田さんは話しをした。

5、連続型ワークショップ（ソーシャルデザイン・ラボ）

5－1　ワークショップ概要

日時：2015 年 7 月 1 日(水) 18:30―21:30、2015 年 7 月 15 日(水) 18:30―21:30、2015 年 7 月 25 日(土) 10:00―17:00

参加者：32 名

（富士通グループ社員 25 名、民間 5 名、学生 2 名）

富士通グループ社員、公開型ワークショップ参加者から希望者を募り、全 3 回で「新しい力を育む学び×IT」におけるソーシャルデザイン・ラボを実施した。初回は、ソーシャルデザインの概要を学び、ソーシャルデザインの体験を実施。第一回と第二回の間に参加者主体のフィールドワークを実施、子どもがいる親の課題についてインタビューを行った。第二回では、インタビュー結果を持ち寄り、親の課題についてカテゴリーを作成し、グループとして取り組む課題を決定。第三回では、参加者が事前に調べて来た"新しい力を育む学び"に関する事例を共有し、またミラツクによるフィールドワークによって得られた"新しい力を育む学び"に関する先駆的な取り組みのケースから"新しい力を育む学び"を実践するための要素を抽出、最終的に 27 のアイデアを生み出した。

尚、NPO 法人ミラツクがワークショップの進行と、報告書掲載のための資料提供を行った。

5−2　連続型ワークショップの構造

連続型ワークショップは、全 3 回のワークショップと 1 回のフィールドワーク、1 回の公開型ワークショップ、1 回の事例収集の 6 つのパーツの組み合わせによって構成されている。

フィールドワーク、公開型ワークショップ、事例収集は、外部領域からの暗黙知と形式知の獲得を目的とし、それぞれは連続型ワークショップの中で場を形成し共有するように設計している。また、ワークショップでは、暗黙知と形式知の往復をグループによる対話によって形成し、常に外部領域から得られた知識を織り込みながら最終的なゴールであるアイデア形成に向けて材料を揃えていくように設計している。

最終的に、形成されたアイデアを得ると共に、ワークショップ中で得られた暗黙知を収拾し別途の形式知化を実施（「得られた成果」の章を参照）、また場の形成を繰り返すことによって同時に参加者間の関係性の構築に取り組んだ。

	連続型ワークショップ参加者	外部領域	知識創造
第一回	【講義】社会価値を基盤としたビジネス開発の概要 【ワークショップ】ペルソナの形成 【ワークショップ】アイデアの形成		形式知の獲得 場の形成 暗黙知の形成
宿題	【フィールドワーク】3名の就学児を持つ親のインタビュー		暗黙知の獲得
宿題	【講義】新しい力を育む学びの先駆的実践例 【ワークショップ】外部領域の課題意識の共有		暗黙知の獲得 場の形成と暗黙知の獲得
第二回	【ワークショップ】インタビュー結果の共有 【ワークショップ】ペルソナのブラッシュアップ 【ワークショップ】扱う課題の決定		場の形成と暗黙知の獲得 暗黙知の形式知化 暗黙知の形式知化
宿題	【リサーチ】先行事例の調査と収拾	！！！！！！！！！！！！！！！！！！！	形式知の獲得
第三回	【講義】インパクト形成の方法 【ワークショップ】リサーチ結果の共有 【ワークショップ】リサーチ結果の分解 【ワークショップ】事例の分解 【ワークショップ】アイデアの形成 【ワークショップ】プレゼンテーション		形式知の獲得 場の形成と形式知の獲得 暗黙知の形式知化 暗黙知の形式知化 形式知の形成 形式知の獲得と場の形成

SOME RIGHTS RESERVED

5−3−1　第一回連続型ワークショップ

日時 : 2015 年 7 月 1 日(水)　18:30- 21:30

1 日目のワークショップの最後に出たアイディア一覧

アイディア 1　横浜の図書館で子供達と親達が夢を語り合う

アイディア 2　課題解決型アウトドアプログラム

アイディア 3　子育てのプロが、学童保育のような場所でワークショップ形式によりアセスメントを提供

アイディア 4　子供チェンジ

アイディア 5　給食バー

アイディア 6　子ども同士が学ぶ場所「こどもが先生」

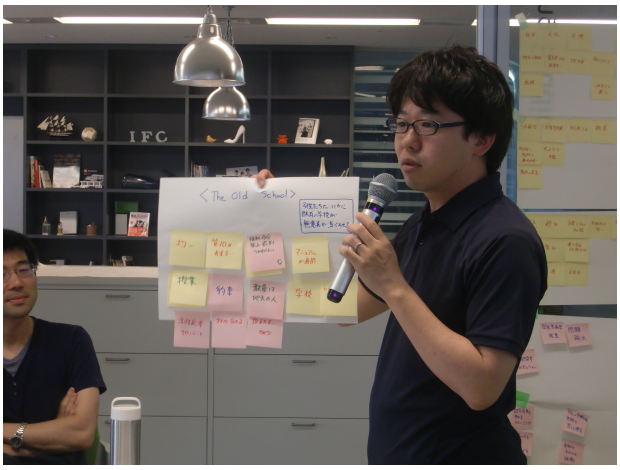
アイディア 7　お兄さんお姉さんと一緒に体験学習＆人工知能での問いかけ

5−3−2　第二回連続型ワークショップ

日時 : 2015 年 7 月 15 日（水）　18:30- 21:30

5−3−3　第三回連続型ワークショップ

日時 : 2015 年 7 月 25 日(土)　10:00- 17:30



6－4　ワークショップから得られたアイデア

アイディア 1　将来をリアルに考えるためのトレーニングプログラム
アイディア 2　学びのカタチを体験
アイディア 3　自分が先生になろう、しいたけ型学習
アイディア 4　チェンジメーカーズインク
アイディア 5　バイクトゥー軽井沢
アイディア 6　Change the world
アイディア 7　夏休みの自由研究を自己表現の場へ
アイディア 8　響創
アイディア 9　不満や愚痴のポイント化
アイディア 10　ザリガニと会話する
アイディア 11　日常を使うもので異文化交流
アイディア 12　私の一冊
アイディア 13　夏休みクラブ
アイディア 14　出張学童
アイディア 15　なりたいものお助けシステム
アイディア 16　地域で学びを活性化
アイディア 17　子供向けのミュージアム
アイディア 18　21 世紀世界一周の旅
アイディア 19　家族みんなで参加する「平成の寺子屋」
アイディア 20　給食バー
アイディア 21　TanQ Town Map
アイディア 22　夏休み探求隊
アイディア 23　こだわりを伝えるプロジェクト
アイディア 24　田舎クエスト
アイディア 25　3D プリンターを使ったモノづくり
アイディア 26　チャレンジキャンプ
アイディア 27　ソーシャルレジュメ

アイデアの例 1

（アイデア 2 : 学びのカタチを体験）

就学する前の子どもを対象として、進学前のあらゆる親子へワークショップを行う。世の中にある多くのサービスは、購入前に試してみるということができることが多いが、教育ではそうした体験ができないことが多い。そこで、このアイディアは、子供たちの学びのスタイルを知る機会を提供することに焦点を置いた。具体的には、学びのテーマパーク、例えば、いろんな学び方を知ることのできるテーマパークを横浜に設置する。体験できる多様なプログラムを用意し、新しく体験した教育を、実際にはどこでできるかな？と学校を探す。

アイデアの例 2

（アイデア 11 : 日常を使うもので異文化交流）

日常使うもので、異文化交流をするアイディア。日常に使うものが、お互いに違うことを知るのは面白いと思って考えた。国内でも、地域によって土地で入手できる素材が違うことがあることからも着想している。ごくごく日常的に使われるもの、例えばスプーン、ハンカチ、枕等、をウェブ上にアップ。それらを、お互いの場所で、物理的に 3D プリンターによってプリントアウトする。国内外の違う地域、または、海外の子どもたちがその地域にあった形状や、「この地域では○○の素材がたくさん取れるから」、「自分たちが住んでいる国は暑いから通気性がいいものがいいんじゃないか」などと、アイディアを応用し、その地域や、国の人たちが使いやすいものに形をかえて楽しむ。ウェブ上にアップしたものをスカイプ等の IT 技術で、「こんなふうに作ったよ」と連絡しあう。そうすることにより、同じ用途のものでも、国内外での形状や素材に違いがあることに気づいてもらう。

アイデアの例 3

（アイデア 16 : チャレンジキャンプ）

自分を信じる力、自己肯定感に焦点を置く。このアイディアでは、できなかったことへのチャレンジを通して成功体験を得てもらうということを大切にする。まずは、やりたいことを子供同士で選択し、実際にやってもらう。やりたいことができたときに、その動画を撮影し、ウェブ上へアップロードする。それを得意としている子は、そのコツを動画に撮影し、ウェブ上にアップロードする。ウェブ上でのユーザー登録は、あらかじめ得意なことをリスト化しておき、開始する。できなかったことが、できるようになった場合、それも動画でアップロードすることとする。親は応援、支援をすることが条件。発展型として、アップロードした動画については質問を企業が対応するような仕組みを考えたい。

夏休み探険隊
①夏休み、何する？
②探険隊に企画書を送ろう
③GOサインが出た！
④探険隊バディとミーティング
⑤熟成…ファンド集め
⑥調査テーマと方向決定
⑦いってきます!!
⑧ブログ更新計画修正
⑨ただいま
⑩発表会
父親
ネット中継
PPT
ブログ
特設Webサイト
Web地図
主体的に学ぶ力
目標達成能力
柔軟性
考える力
行動力

5−5　参加者の事後インタビュー報告

全三回終了後に、5名の方に事後インタビューを行った。

富士通グループ会社　内部の社員の方　3名
外部組織からの参加者の方　2名

□インタビュー結果

A さん

本当に個人的ですけど、(ワークショップに参加して)本来の自分に戻ろうと思いました。やっぱり、自分のやりたいというか、自分が本当に楽しいと思って仕事をしようと思った。(中略)最後にひとりでまとめるとこがあったんですけど、私、時間がなくなってしまって、うまくまとめれなかったんですけど、仕事のときにこういうふうにまとめてきたのはどういうときかなと思って、仕事の場面でも、大学の場面でも、パートナーの場面でも私は今でも、どうやってきたんだろうと考えたときに、人に助けられてきたと思ったんです。今（の仕事）みたいに一方的に言われて、情動している関係ではなくて、私みたいなものをうまく拾って、ビジネスだったりに、社会貢献だったりにうまく繋げてくれる人がいたんだろうと思ったんです。それは仕事場だったら、上司だったかもしれないし、お客様だったら、本当にお客様先だったかもしれないんですよね。それを改めて気づいたし、そういうところで人に活かしてもらわないといかんと思ったんですよね。（中略）（自分の会社が）いい会社だったというのは自分のことをある程度見てくれてた人がいたんだと気がついた。だからそういうところで、やっぱりまだまだ修行していかさないと、生かしてもらわなきゃいけないかな、とか思ったりもしたんです。

B さん

今回（のラボの宿題としての）インタビューしたのが低学年、今年四月から一年生になったとか小さいお子さんお持ちのお母さんにインタビューしたんですけど、幼稚園と小学校の連携、橋渡しが場所によってかもしれないんですけどうまくいってないんだなって。一年になったらこれを学ぶからそれまでに幼稚園でここまで学ばせておこうとか

そういう連携がうまくいってないことにフラストレーションがある方がいるんだなって。幼稚園までしてなかったのに、小学校でいきなり計算しなきゃいけなくなって、他の子はお稽古で習ってるかもしれないけど、「うちはやってなかったらすでに出遅れみたいになっちゃって」って言ってる方もいて。全ての教育機関が連携うまくいってないとはいえないけど、場所場所ではそういうのあるのかなって（気づいた）。

（ワークショップでは）普段使わない脳みそをつかったんで毎回毛穴が開く感じ。毎回自分の知識や経験不足を思い知って、焦りというか、それは常に（ワークショップが）終わるたびに感じましたね。教育システムに関しても全体的なイメージでしかとらえてなかったけど、リアルな現場の意見を聞いたり、WS でいろんな方と、たまにランダムで他のチームの方とお話すると、こんなに見方や考え方も違うし、他のチームでインタビューしてきた話聞くと、保護者でも全然違うんだなって。焦りました。圧倒的な知識不足、私全然知らなかったんだなって。

C さん

基本的に私の部隊が企画なのもあって、すごい狭い範囲とか、設備の設計施工なのですごくハードな部分なんですけど、会社的にもまちづくりのテーマもあって、スマーターシティという取り組みとして、より賢く都市を IT の力で賢くするというの取り組みがあるので、元々そこにも興味もあるからどうやったら今回の話が結びつくんだろうとか、そういう意味で、妄想は好きなのでそういう妄想が（笑）それがどうビジネスになるかとか、そういうところまではもちろん今の状況では、もちろん、思想はすごいあるんですけど、会社的にはなかなかビジネスにはならないというのもあって、いきなり私が妄想したところであんまり変わらないと思うんですけど、でもそういう（ワークショップをして協働で作り上げるような）取り組みに会社内でも興味持ってもらいたいなとか。私は本当に偶然、今の部署にはいって、すごい好きな仕事させてもらって、そしてそれを続けられるっていうすごい恵まれた環境にいるんですけど、でも自分で選んだわけじゃなくて、すごい偶然なんですね。みんなが好きな仕事やってほしいという思いがもともとあるんで、それが必然的になると取り組みができないかとか。だからそのためには、自分でやっぱり、さっき教育じゃないけど、自分が好きな分野とか、っていうのが見いだせないんだろうなっていうのがちょっとあっ

て。そういう意味では、どうやったら社内がより活性化するかっていうところでは、（ワークショップに参加して）とても参考になったと思います。

ちょっと、最後の振り返り時にもお話させていただいたんですけど、最初のキッカケは、本当に街づくりとか、ワークショップってどういうことするのかなって軽～い気持ちで参加したんですけど、そのクローズドのワークショップじゃなくオープンなのにも参加させていただいたのも大きなきっかけだと思うんですけど、教育とまちづくりって、なんだろう。一緒に考えなきゃいけないんだなっていうすごい気づきをもらって。私はどちらかというと、まちづくりしたいとか、日本の良さをもっと海外に発信したいっていう、まちづくりから観光みたいなそっちの流ればっか考えてたんですけど、それ以前に、まちづくりするために、それを自分ごととして考えるひとを増やさないとまちって活性しないんだっていう、その前段の重要性をしれたっていうのが、ワークショップ自体の気づきをもらって、予想外って言ったら失礼なんですけど（笑）ちゃんと、今後わたしのなかでまちづくりがテーマだけれど、そこにどう人をこうかれめていくかとか、ちゃんと考えていかないといけないんだなっていうので、ちょっと自分の中では、視野が広がった感じがしますね。

D さん

(ワークショップに参加されて、参加したからこそ生活への変化とか仕事への時間への変化とかはありますか？という質問に対して)やっぱり子供のことに関して。でも、すごいインパクトとかいわれると、自分の課題として明確にしたいものはあって、さっきちょっと言いましたけど、やっぱりかみさんとそういうテーマで深ーく話しをしてないなって気づいて。一度は、それをしなくちゃいけないんだなとは（ワークショップの中で）思ってましたね。ちょっと怖い感じもしますし。指導方針みたいな話になりそうですし、それって個と個の価値基準が、ずれてるとなかなかいいコンフリクトも起こりそうな気がするし。それはいいのか、恐ろしいのかわかんないけど、そういう話はしなくちゃいけないんだろうなって（ワークショップ終わって）思ってますよね。

E さん

私が一番（ワークショップの中で）時間的にすごくよかったなと思ったのが、最後のワークショップで真木さん（NPO 法人ミラツク職員）が、こうみんなが個人個人でアイディアを出す為に、インタビューのダイジェストを紹介していただいたじゃないですか。あそこにいろんなことが凝縮されていて、あそこにそれぞれの本当の最先端で、新しい教育に取り組まれている人の、「あ、そうそう！」その自分のなんとなく思っていたことを言語化して伝えてもらって、「そうそう！そういうことよ！」みたいなのがあったのが、すごく、そこが、（ワークショップ）全部の中では一番印象に残っています。（中略）（言語化されたということは）自分の中で感覚で分かったことを人に伝えるための言葉を手に入れたっていうようなことですね。（中略）「あぁ、そうか、こういう言葉で表現すると、人に伝わるんだ」っていうようなこととか、まぁ（ワークショップのテーマであった）教育に限らず、最近ずっと思っていたのが、教育に限らず、結局みんな根本に根が、ずっともっとこう、根っこまで落としていくと一緒のことなんだなぁみたいなことも、思って。なんて言えばいいのかなぁ。まぁ分野は関係なく、共通的に同じようなことがあるっていうようなことも再確認して、まぁ自分のやっていることにまた一つ、迷いがなくなったかなというような感じですかね。

6、プロジェクト全体の振り返りと今後の展開

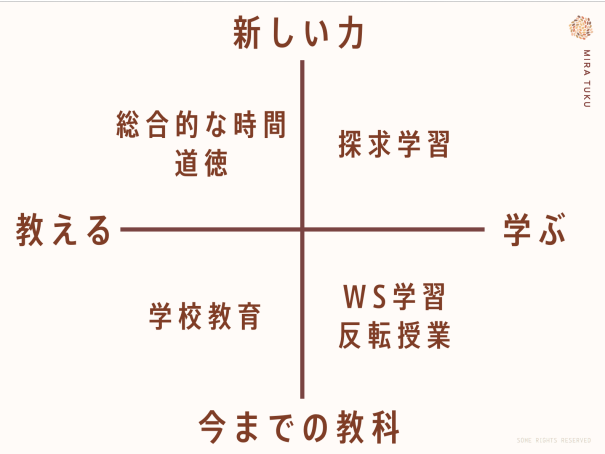
6−1　プロジェクトから得られた成果まとめ

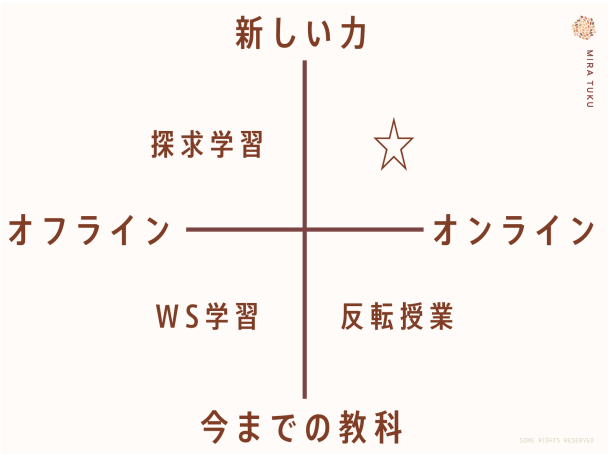
6−1−1　教育領域におけるテーマ設定

本プロジェクトでは、事前調査によって横浜の社会課題の中でも重要度が高い 5 つの視点（「都市のシビックプライド」「教育」「子育て」「高齢化」「中小商店の衰退」）を明らかにし、また、5つの課題から、富士通グループ社員へのインタビューで明らかになった富士通グループ社員の関心事との接点となる「教育」を取り上げた。

「教育」に関して、富士通グループが取り組むに適した領域に関する仮説形成を行い、教育の専門家や実践者の方々にインタビュー調査、データリサーチや、書籍からの知見や前例調査を実施した。結果、学校教育の変革ではなく、民間が取り組めるものとして先端的な教育アプローチに注目。特に、”新しい力を育む学び”に焦点を置くこととした（経緯の詳細は「予備調査の報告」を参照）。また同時に、IT を用いた反転授業が従来の教科教育に対応しているのに対し、”新しい力を育む学び”にはオンライン領域の取り組みが未発達であることが確認された。

そこで、今回のプロジェクトから、新しい力を育む教育×IT の組み合わせが、横浜の社会課題、富士通グループ社員の関心、世の中におけるブルーオーシャンの 3 つの観点から重要度が高い領域であるという仮説が得られた。





資料提供：NPO 法人ミラツク

6−1−2 ”新しい力を育む学び”に関する先駆的実践事例

本プロジェクトでは、先進的な事例となる教育現場として、東京コミュニティースクール（東京）、ラーンネットグローバルスクール（神戸）、NPO 法人 cobon(大阪)、国際バカロレアのフィールド調査を行った。フィールド調査におけるインタビューの結果を取りまとめ、疑似フィールドワークが可能な資料としてフォトノートを作成した。

事例１：東京コミュニティースクールについて

東京都中野区に 2004 年に開校。小学校１年生から６年生の３０名程度が通うフリースクール。「探究型学習」を週に３回、カリキュラムに取り入れている。年間に６つのテーマを扱うことはスクール側から決められているが、テーマから枝分かれする小テーマは、児童自らが決定し、街の大人に話しを聞きにいくフィールドワークの実施や、文献調査などを通して、探究を行っている。最後には、保護者や、テーマに関する関係者の前での発表会が実施され、児童が出した価値のあるアイディアとして発信している。

事例２：ラーンネットグローバルスクールについて

アフタースクールから、1998 年にフリースクールとして開校。神戸市六甲駅の近くにはプレスクールを、六甲山の上には小学生と中学生が通うフリースクールがある。探究型の学習を進めており、年齢に応じたテーマ設定をし、低学年向けには教師（ナビゲータ）の支援により探究を進められるようにといった段階を設ける。大人と子どもが分け隔てなく教育が行われ、基本理念は「自分を照らし、相手も照らし、お互いに成長すること」である。

事例３：NPO 法人 cobon キッズシティーについて

2007 年に設立された特定非営利法人。事業の一つであるキッズシティーは、設立当初から取り組んでいる事の一つで、参考にされたとされるのは、ドイツのミュンヘンが夏に大規模に行っている「ミニミュンヘン」という子どもだけが作る町とその運営の取り組みである。キッズシティーでも、子どもだけがつくる街づくりを行うが、職労へ

深く関わり合いが持てるように工夫されているのがキッズシティーである。自ら社会のルールを考えていく、変えていくことができることを疑似体験できるのが特徴である。

事例４：国際バカロレアについて

2014 年に日本の国策となった国際的な教育プログラム。「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに飛んだ若者の育成」を目的にしている。この目指すべき方向と日本の文部科学省が設定する学習指導要領が目指すべき方向が類似しているため、日本での普及に力を入れることとなった。授業のほとんどは、英語で行われ、教科横断の科目が多い。従来の知識を教師が児童・生徒に与えるのではなく、児童・生徒が自ら学ぶことに力が注がれる。

6－1－3　公開型ワークショップから得られた市民の関心事

全三回の公開型ワークショップから、延べ約 200 名の参加を得、結果として新しい力を育む教育に関心を持つ、横浜及び関東圏のアーリーアダプター層の関心事が 40 テーマ／トピックが提示された。

◯第一回公開型ワークショップ

１：家庭に親の教育の関わり方

２：企むということは個人なのかチームなのか

３：都会でのコミュニティスクールの価値

４：義務教育における外国語教育

５：リタイア世代の学び直し

６：いびつな人を活かすために普通の人が出来ること

７：大人を子どもらしくするには

８：変化することを恐れない人をどうやってつくるか

９：小学校の子どもが毎日宿題をしない。塾に入れる？

１０：子ども探究心に火をつけるには？

１１：過疎地における学校教育のあり方

１２：引きこもっている人との接点のつくり方

１３：企業の人を対象に、親向けのワークショップをするには？

１４：子どもが楽しく学ぶために大人はどう関わればいいか？

１５：指導者の存在感は大きい方がいいのか、小さい方がいいのか

◯第ニ回公開型ワークショップ

１：経験を言葉にするには？

２：地方創生にむけた学び

３：企業におけるワークショップ型学びの価値

４：なぜ失敗を恐れる社会になったのか？

５：大学でまなんでいることが仕事にならないのか

６：作ったものをみせるステージをどのようにつくればいいのか？

７：子供たちが町をつくる新しい学び方

８：それぞれのフィールドでメタ認知をどのように実践しているのか

９：大人をどう学びに向かわせるか

１０：いつから英語教育をはじめたらいいのか？

１１：大人や高齢者のプレイフルラーニング

１２：大学生の方が、ぜったい受けた方がいい授業は？

１３：都市部と地方の方との学びの差について

１４：プレイフルなお年寄りが活躍できる社会をつくるには

１５：横浜にこどもがワクワクする小学校をつくるとしたら？

◯第三回公開型ワークショップ

１：小学、中学受験は必要なのか？

２：社会的経済的影響への解決策

３：学校外にまなびの場を広げよう

４：学校外の方がのぞむこどもの学ぶ力

５：廃校、または分校になってしまう、どうすればいいか

６：こどもたちが主体性をもつ授業とは

７：オンライン社会見学への可能性

８：学んだことが応用され続けるには？

９：横浜のこどもたちが自分ごとにできるには

１０：自己を肯定する力をつけるには

6−1−4　連続講座から得られたアイデア

全三回の連続型ワークショップを実施し、約 12 時間（3 時間、3 時間、6 時間）のワークショップを経て”新しい力を育む学び”を生み出すための 27 のアイデアが得られた。

アイディア１　将来をリアルに考えるためのトレーニングプログラム

アイディア２　学びのカタチを体験

アイディア３　自分が先生になろう、しいたけ型学習

アイディア４　チェンジメーカーズインク

アイディア５　バイクトゥー軽井沢

アイディア６　Change the world

アイディア７　夏休みの自由研究を自己表現の場へ

アイディア８　響創

アイディア９　不満や愚痴のポイント化

アイディア 10　ザリガニと会話する

アイディア 11　日常を使うもので異文化交流

アイディア 12　私の一冊

アイディア 13　夏休みクラブ

アイディア 14　出張学童

アイディア 15　なりたいものお助けシステム

アイディア 16　地域で学びを活性化

アイディア 17　子供向けのミュージアム

アイディア 18　21 世紀世界一周の旅

アイディア 19　家族みんなで参加する「平成の寺子屋」
アイディア 20　給食バー
アイディア 21　TanQ Town Map
アイディア 22　夏休み探求隊
アイディア 23　こだわりを伝えるプロジェクト
アイディア 24　田舎クエスト
アイディア 25　3D プリンターを使ったモノづくり
アイディア 26　チャレンジキャンプ
アイディア 27　ソーシャルレジュメ

6−1−5　就学児を持つ親の課題意識

参加者が連続型ワークショップの中で行った就学児を持つ親を対象とした計 30 名のインタビュー結果を再度分析し直し、就学児を持つ親が感じている課題意識について 18 のカテゴリーが得られた。

就学児を持つ親の課題意識

カテゴライズの結果、横浜を中心とした神奈川県下の親が持つ課題意識は、①学校／先生の課題、②親のワークライフバランス、③PTA、④子どもの遊び方、⑤教育方針、⑥幼稚園・保育園、⑦IT、⑧親同士のコミュニケーション、⑨塾、⑩運動、⑪障がいと将来、⑫教育コスト、⑬習い事、⑭学童、⑮地域教育、⑯いじめ、⑰受験、⑱親子のコミュニケーション、の 18 カテゴリーに分類された。これらは、横浜の教育領域における社会課題であり、子育てをする親の潜在的ニーズを示している。

就学児を持つ親の課題MAP

MIRA TUKU

学校/先生

教師の残業/学校のマネジメント層の多忙化/多忙による人間構築の弊害/教師の社会人力とマンネリ化/現状の学校の欠点を許容/暴力行為への不安/学校外での授業/体験学習の必要性/学び方が指導されない/先生以外の大人のサポート/年配の先生への不安/先生と対話の時間/少人数授業の希望/教育の格差/ディベートへの期待/先生を選択できない/学校への肯定意見/教師が多忙すぎる/授業への不満/学校のオープンネス/学校教育のみで満足/教師の異なる意見/教師への期待

教育方針

やりたい事をのびのびと/手に職/幸せ/公文/反便利/感謝/課題発見/学校より保育園/TV・ゲームNG/発信力/基礎/友人/多様な経験/グローバル対応/自立/子どもだけでは判断できない/親の背中を見て育つ/受験/文化/海外のスクール/可能性を伸ばす/ほめてのばす/やさしい子/親ができなかったこと/チャレンジさせない/熱中できるものをもつ家で学ぶ

塾

学習は塾任せ
／塾は友達と

教育コスト

お金はかけない
／費用

地域教育

公園
／地域の主体性

働くお母さん/親のWLB

育休／親の仕事・働きっぷりを見せ合い／夫の協力・非協力／主婦に対する焦り／家事が多い／時短と残業

幼稚園・保育園

幼稚・保育園の放課後/幼稚・保育園の教育内容の差異/保育園の先生が変わること/社会と幼稚園のルール/シュタイナー幼稚園/保育園の効率化/卒業後への不安

運動

しつけ／親が指導者に／保護者の干渉／どのくらいやるか／週末多忙／何をやるか、種目／いじめ

習いごと

期待/選択理由/やりたいことがない/お金/多忙

いじめ

登校拒否/いじめが心配/いじめへの対応/小さないじめは日常的/いじめは親に隠す

PTA

PTA会長の意思・決定/規則の不明瞭さ/女性の多さ/男性のPTA会長/ベルマーク廃止/PTAの引き継ぎ/PTAによる子供の孤食

IT

クリエイティブのためならOK/タブレット・電子教科書/ITは相方/ベネッセ/外部のIT専門家/ゲームに夢中/ITに触れる時期/ITで先生を楽に/コンテンツの信頼性/ITを触らせたくない

障がいと将来

障がい者への配慮/障がい者の教育/発達障がいかも？/アタッチメント障がい

学童

学童内容の不十分さ/学童の送迎/学童と児童クラブの融合/学童の充実度/キッズ？学童？/学童が宿題をみない/学童のNPO化/学童・保育の不足

受験

学校格差/私立派/公立派/中学受験をするまたは、しない/学校選びに困る/中高一貫/イメージがない/先生の質

子どもの遊び方

公園のルール/子どもらしく/世代間/はみ出した遊び/家遊び/障がい/遊び相手が親のつながり

親同士のコミュニケーション

親の趣味の繋がり/割り切りの付き合い/子どもが起点の付き合い/セミナー参加/しがらみ・序列/子どもが遊ぶための親からの許可

親子のコミュニケーション

扱い方/母親とベタベタ/会話の機会・工夫/会話がない

SOME RIGHTS RESERVED

資料提供：NPO 法人ミラック

6−1−6　新しい力を育む教育の特徴

参加者が連続型ワークショップの中で行った事例からの要素抽出の結果を再度分析し直し、未来をつくる力（新しい力）及び未来をつくる力を支える 20 カテゴリーが得られた。

現在、”新しい力を育む学び”の実践は、小さな取り組みが点在している状況にある。そのため、各実践者はそれぞれの取り組みから得られた暗黙知を持つ一方で、それぞれの取り組みを統合したものが存在しない。今回、3 つの事例を中心に実践によって培われたものを質的調査によって抽出し、結果、「新しい力を育む教育が築く”10 の未来をつくる力”」と「未来をつくる力を支える 20 カテゴリー」が 1 枚の MAP として得られた。今後、従来の教科中心の教育を変革し、新しい価値を社会に生み出すためのコンセプトとして、10 の未来をつくる力、及び未来をつくる力を支える 20 カテゴリーを活用することが出来る。

A：新しい力を育む教育が築く”10 の未来をつくる力”

①こじつける力、②自らルールを変える、③複眼的視点、④好奇心、⑤俯瞰する力、⑥探究する力、⑦人・モノ・自分を大切に、⑧変化に対応できる、⑨Change Perspective、⑩自己決定

B：未来をつくる力を支える 20 カテゴリー

①Connecting Dots：地域、学校外のセクターなどとのつながり

②姿勢／マインド／スタンス：未来をつくる力につながる姿勢／マインド／スタンス

③フィールドワークの実施：野外を含むフィールドワークの実施とその周辺にあるプレゼン、調べもの学習

④新しい評価：新しい力を育む学びを評価する指標

⑤遊び：自由な雰囲気のもとで行われる”遊び”の時間

⑥大人のあり方：真剣な大人の姿、フラットな関係

⑦教師のあり方：教える立場ではなく学びを促す立場

⑧未就学児：未就学児からはじまる学び

⑨サイエンス：科学に関する学び

⑩親と子：親と子が一緒に学ぶことと、子ども同士で学び解決することの両方について

⑪社会課題を扱う：社会のリアルな課題を用いた探究を行う

⑫多様性・文化：国際交流等、多様性の中から得られる学び

⑬ICT：オフラインで行うべきことと ICT で加速できることの両方

⑭文化：歴史を知る、文化を知る、など背景を養う

⑮DIY：自分たちでつくることで得られる学び

⑯バカロレア：国際バカロレアのフレームと潮流

⑰身体を使う：体を動かすことで得られる学び

⑱基礎学力：基礎的な学力によって学びが加速する

⑲場の提供：コンテンツだけでなく、学びが誘発される場を提供する

⑳エネルギーの爆発：時に思いっきりエネルギーを爆発させることも必要

新しい力を育む学び

MIRA TUKU

未来をつくる力（新しい力）

①こじつける力、②自らルールを変える、③複眼的視点、④好奇心、⑤俯瞰する力、⑥探求する力、⑦人・モノ・自分を大切に、⑧変化に対応できる、⑨Change Perspective、⑩自己決定

Connecting Dots

コネクティングドッツ/地域との協働/土地の人/学校外のセクター/大学生/セクターを超えた連携/コミュニティー/協働/地域の特性を生かす

身につける姿勢/マインド/スタンス

責任感/チャレンジ/大人が忘れた感覚/あきらめない/不安が大事/リーダーシップ/創造力/共感時間軸/競争相手は自分/思いつきが大切/目の前のことに集中する/コンテキスト

フィールドワークの実施

野外での体験/フィールドワーク/学びの手法/対話/成功体験/良質な問い/本気のプレゼン/何がしたいのかを見つける/参考文献/本物体験

新しい評価

新しい評価軸/異なる視点/成長をみる/個性に対応

遊び

遊び/リラックス/安心/自由な雰囲気/エネルギーと暮らし/食育

大人のあり方

真剣な大人/大人のロールモデル/子どもも大人がフラットな関係

教師のあり方

先生ではなくファシリテータ/道化とユーモア/ここがいいねと具体的に褒める/一人一人をみる/無難なものを選ばせない/強制・罰則はなし

未就学児

未就学児

サイエンス

科学/医療教育/Health

親と子

親子で学ぶ/親をまきこむ/子ども同士で解決

社会課題を扱う

社会課題を扱う/エネルギーと暮らし/食育

多様性・文化

国際交流/多様性

ICT

オフライン/ICTの活用

文化

歴史を知る/芸術/言葉/文化

DIY

自分でつくる（DIY)/モノづくり/子どものまち

バカロレア

国際バカロレア

身体を使う

身体を使う

基礎学力

ベーシックな学習は必要/塾/習い事

場の提供

場の提供/場所/週3日探求

エネルギーの爆発

エネルギーを爆発させる

RESERVED

資料提供：NPO 法人ミラック

6−2　今後の展開について

今回得られた成果を元に、今後の教育領域（特に"新しい力を育む学び"）へのアプローチとして以下の 5 点が挙げられる。

①"新しい力を育む学び"のための教員トレーニング及び教育補助ツールへの IT の活用

②"新しい力を育む学び"のための学習ツールへの IT の活用

③"新しい力を育む学び"のための新しい評価軸の策定

④"新しい力を育む学び"を普及するための IT を用いたサポート

⑤"新しい力を育む学び"の先駆的な実践者との共創的な開発

①"新しい力を育む学び"のための教員トレーニング及び教育補助ツールへの IT の活用

文部科学省の担当官の言及にもあるように、新しい力を育む学びには、従来の教員とは異なるファシリテーター型人材やコネクター型人材が求められる。そうした人材を効率的に育成し現場での実践をサポートするために、IT ツールによるトレーニングのサポート、現場での教育補助が必要になる。ゆとり教育時代に総合学習が失敗した要因は、実施側の教員のスキル不足であったと考えられている。今後、国際バカロレアの普及施策が進むことも踏まえ、教員トレーニング及び教育補助ツールへの IT の活用を行うことで、新しい変化に対応した IT ツールの開発が行える。

②"新しい力を育む学び"のための学習ツールへの IT の活用

連続型ワークショップでも、異文化理解促進のために、3D プリンターを用いた距離を超えたプログラムのアイデアがあったように、"新しい力を育む学び"を実施するためのツール開発が今後必要になってくる。現状は、スカイプを使用した現場にいない大人を巻込んだ学習を行う等、各教員が既存ツールを活用して対応している。新しい学習ツールを開発することで、"新しい力を育む学び"の質を高めることに取り組める。

③"新しい力を育む学び"のための新しい評価軸の策定

"新しい力を育む学び"では、従来のテスト方式による評価が馴染まない。一方で、何らかの評価軸の策定が求められている。IT の活用によって、複数データを用いた分析、センシングによるデータ化、など感覚で捉えられていたものの数値化が可能になる。また、新しい評価軸を策定することで、より早く "新しい力を育む学び"が普及する。

④"新しい力を育む学び"を普及するための IT を用いたサポート

現在、"新しい力を育む学び"は先駆的な実践者とイノベーター、アーリーアダプター層の親子が参画する、非常に規模が小さいものとなっている。また、連続型ワークショップでは、 様々な種類がある"新しい力を育む学び"を試しにバーチャル体験するアイデアが生まれたように、親にとっても未体験の "新しい力を育む学び"を体験する機会を得ることも、 "新しい力を育む学び"の普及をサポートすることになる。情報発信だけでなく、体験のバーチャル化なども通じて、 "新しい力を育む学び"の普及を IT によってサポートすることが出来る。

⑤"新しい力を育む学び"の先駆的な実践者との共創的な開発

今回のプロジェクトによって、 "新しい力を育む学び"の先駆的な実践者、及び横浜の教育関係者、親、大学関係者、地域の NPO などとのコネクションが築かれた。これらの関係性を活用し、 "新しい力を育む学び"の先駆的な実践者と共に、横浜をフィールドに、ツール開発や社会実験を行う、共創的な場（リビングラボ）を構築することが可能となった。今回得られた関係性を基盤（プラットフォーム）とし、従来型の事業開発ではなく、リーンスタートアップ型の事業開発を行うことで、教育分野（特に、 "新しい力を育む学び"×IT）の新規事業を立ち上げていくことが出来る。

※リビングラボ：新規事業や新規アイデアなどの実験的な取り組みについて、顧客を超えた外部領域の人々の協力を得ながら共に創る場。出来上がった仮説の適用方法の探究ではなく、外部領域の人々のフィードバックを得ながら双方向に協力し合い、より良いモデルの探究を行う点がマーケティング調査や一般的な社会実験と異なる。

これら、①～⑤の 5 つの観点が、今回得られた 6 つの成果を元とした今後の展開として考えられる。また、横浜を舞台としたことによって培われたネットワークを活かし、横浜を足がかり地域とした取り組みが可能となった。特に⑤の観点のリビングラボの実施が、今後の展開の鍵となると考える。

また、今回、リサーチ及び公開型ワークショップ段階では、横浜市民（行政、事業者、NPO、大学、他）の協力を多く得たが、連続型ワークショップ段階では横浜市民の参加者の割合が減ってしまった。一方で、とっかかりとなる関係性は築けたことから、今後、横浜市民をより積極的に巻込んだ実践を行うことがより質の高いプラットフォームの構築につながる。また、そのために、横浜市民を中心とした課題解決の場を定期的に設ける（1.5 ヶ月に 1 回程度、20-30 名）ことで、より密度が高い関係性を構築していける。

今回得られた成果を活かすために、より具体的な実践を横浜をフィールドに展開していくことが必須と言える。ネットワークは一定の時間が経つと雲散してしまうため、早い段階でネットワークを活かした取り組みを築くことが、ネットワーク構築にかけた費用の回収へとつながる。まず、こうした取り組みへとつなげていくために、本プロジェクトの成果を積極的に対外発信し、関心を持つアーリーアダプター層からのコンタクトをしかけることで、教育分野における新規事業の効率的な開発へとつながっていくと考えられる。